

## 目 次

自尊感情や自己肯定感に関する研究（４年次） . . . . . 3

言語活動の充実に関する研究（２年次） . . . . . 39

## 研究主題

# 自尊感情や自己肯定感に関する研究（4年次）

### 目次

第1	研究の概要	4
第2	研究の背景とねらい	5
1	研究の背景	5
2	本研究の目的	5
3	3年次までの研究成果	5
(1)	1年次（平成20年度）の研究成果	5
(2)	2年次（平成21年度）の研究成果	6
(3)	3年次（平成22年度）の研究成果	6
4	4年次の研究	6
(1)	研究のねらい及び研究仮説	6
(2)	研究の主な視点	7
第3	研究の方法	8
1	慶應義塾大学及び研究協力校4校との共同研究	8
2	研究協力校4校における実践研究	8
第4	研究の内容	9
1	自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向の把握	9
(1)	第三次実施計画策定の基本的な考え方及び「現状と課題」と「改善の方向」	9
(2)	「他者評価シート」の開発とその活用	10
2	学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組	14
(1)	実践方法	14
(2)	実践内容	18
(3)	実践事例	20
(4)	実践の結果	28
3	要因分析に関する慶應義塾大学の調査研究	31
(1)	平成22年度の調査研究	31
(2)	平成23年度の調査研究	37
第5	研究の成果と今後の方向性	38
1	研究の成果	38
2	今後の方向性	38
	参考文献等	38

### < 研究の成果と活用 >

#### 1 研究の成果

- (1) 自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握する方法として「他者評価シート」を開発し、一人一人の自尊感情や自己肯定感の傾向を把握する方法を提示
- (2) 学校の教育活動全体を通して意図的・計画的・組織的に子供の自尊感情を高めるための教育を推進するための方法の提示

#### 2 研究成果の活用

子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の推進に活用できる「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導資料」【発展編】の都内公立学校等への配布し、学校での家庭や地域と連携した教育活動等に活用する。

第1 研究の概要

平成23年度教育課題研究

自尊感情や自己肯定感に関する研究（4年次）

＜社会背景と学校の現状＞

- ・核家族世帯の割合の増加
- ・地域の人間関係の希薄化
- ・人間関係を築く力や規範意識の低下
- ・いじめや不登校などの問題
- ・生命尊重の心の乏しさ
- ・自尊感情や自己肯定感の低さ
- ・特別な支援が必要な子供の教育の充実の必要性

＜関連施策等＞

- ・東京都人権施策推進指針
- ・「東京都教育ビジョン」（第2次）重点施策25「人間関係を築く基礎となる力の育成」
- ・平成23年度教育庁主要施策〈豊かな心を育てる〉〈国際社会で活躍できる人材を育てる〉
- ・東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画

1年次から3年次までの研究

1年次(平成20年度)「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための5観点を設定

- 心理学者ローゼンバーグなどの自尊感情の捉え方についての先行研究から「自尊感情とは何か」について明確化
- 自尊感情の傾向を把握するための意識調査の実施(都内公立小学校第1学年～高等学校第3学年の児童・生徒12,740名)→「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」(試案)の作成

2年次(平成21年度) 自尊感情の定義付け、自尊感情の傾向を客観的に把握する「自己評価シート」の開発

- 児童・生徒等の自尊感情の傾向を把握する「自己評価シート」(質問項目32項目)の開発
- 研究協力校(大田区立小池小学校)において、「自己評価シート」を活用した実践→研究概要(リーフレット)の作成・配布(都内公立学校各1部ずつ配布 3,500部作成)

3年次(平成22年度) 自尊感情測定尺度(東京都版)「自己評価シート」及び発達段階に応じた指導方法の開発

- 発達段階に応じて自尊感情の傾向を適切に把握する「自己評価シート」(質問項目22項目)及び3つの観点による傾向分析等の開発→「子供の自尊感情や自尊感情を高める指導資料【基礎編】」の作成・配布(都内公立学校・園の全教員に配布 63,500部作成)
- 研究協力校・園(文京区立第一幼稚園、荒川区立峡田小学校、立川市立立川第三中学校、都立荻窪高等学校)による実践事例開発

4年次(平成23年度)の研究

目指す子供像

すすんで自分のよさを発見し、自分をかけがえのない存在だと思い、自信をもって行動する子供

研究のねらい

- 自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向の把握方法を開発
- 学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組についての効果検証

研究仮説

子供の自尊感情の傾向を把握し、学校・園の教職員の共通理解の下に、教育活動全体を通して自尊感情を高めるための取組を意図的・計画的・組織的に推進することによって、子供は、すすんで自分のよさを発見し、自分をかけがえのない存在だと思い、自信をもって行動するようになるだろう。

研究の方法

【研究協力大学】

調査研究

(慶應義塾大学)

- ・自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発
- ・自尊感情の高低に関連する要因に関する調査研究
- ・研究協力校における「自己評価シート」等の調査及び分析結果を踏まえた助言

【東京都教職員研修センター】

基礎研究及び開発研究

- ・自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発
- ・全教職員が教育活動全体を通して、意図的・計画的・組織的に取り組むための基礎研究
- ・「自己評価シート」を活用し、子供の自尊感情の傾向を把握した授業実践等の実践研究
- ・指導資料の作成と普及・啓発

【研究協力校】

実践研究

小学校(国分寺市立第五小学校)

- ・自己の成長を振り返る学習
- ・自己の個性を発見する学習等

中学校(清瀬市立清瀬中学校)

- ・生命の大切さを考える学習
- ・友情の尊さについて考える学習等

高等学校(都立第三商業高等学校)

- ・主体的に進路を考える学習
- ・成就感や連帯感を味わえる学習等

特別支援学校(都立墨田特別支援学校)

- ・自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発等

＜研究成果の活用＞

子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育を推進するための「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導資料」【発展編】を都内公立学校等に配布し、学校での家庭や地域と連携した教育活動等に活用

## 第2 研究の背景とねらい

### 1 研究の背景

本研究は「東京都教育ビジョン（第2次）」（平成20年5月）に基づき、「子供の自尊感情を高めるための教育の充実」を推進するための研究として、平成20年度より5ヵ年計画で進めているものである。

本研究に関する現状と課題として、「東京都教育ビジョン（第2次）」では、「他者との人間関係をつくることが不得手になっている子供が増え、そのことがいじめや不登校などの問題の一因になっているとの指摘がある。人間は他者や社会との関わりの中で生きていくものであり、人間関係を築いていく力の育成は重要な課題である。」と述べている。次代を担う子供たちが、他者や社会との関わりの中で生きていくためには、人間関係を築く力を身に付け、自分と他者との関わり、社会の中での個人の役割や責任に対する自覚などを涵養し、社会への参画意識を高めることが必要である。

一方、教育環境の整備の視点からは、全ての子供たちに次代を担う力を身に付けさせるためには、特別な支援が必要な子供たちの個に応じた適切な教育環境を整備していかなければならない。乳幼児期から青年期までの園・学校間等における接続を円滑に行うとともに、幼稚園、小学校、中学校等に在籍する教育上特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒に対する適切な指導及び必要な支援の体制整備が急務とされている。

また、「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」（内閣府 平成19年2月）によると、子供たちの規範意識の低下などの問題も指摘されている。このことから、学校・家庭・地域が連携し、社会全体で子供の教育に取り組むとともに、子供たちの規範意識を高め、社会の一員として公共心や思いやりの心を育成していくことが大切である。

このような社会で、子供たちが自分の未来を切り拓いていくには、相手の考えや気持ち、立場などを「想像」し、新たな関係や社会を「創造」していく力を身に付けること、積極的にコミュニケーションを行う能力の育成や思いやりのある豊かな人間性などの育成が必要である。そこで、社会の一員としての自覚をもち、自分に自信をもって生きていくために、自分のよさを肯定的に捉え、自分のことをかけがえのない存在、価値ある存在として捉える自尊感情や自己肯定感を高めていくことが重要である。

このことによって、異なる価値観をもつ相手を受容できたり、自分の大切さを他の人の大切さにつなげたりすることができる。このことは、人権尊重の理念の理解や人権意識を高める上でも重要な視点と考える。

### 2 本研究の目的

以上の背景から、本研究における5年間の研究の目的を次のように定めた。

「子供一人一人が自己に自信をもち、新たなことや困難なことにも挑戦しようとする意欲を高める教育を推進するため、子供の自尊感情の形成に係る研究を行い、その成果を生かした指導内容・方法を開発するとともに教員研修を実施する。」

### 3 3年次までの研究成果

#### (1) 1年次（平成20年度）の研究成果

「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための5観点を設定

心理学者ローゼンバーグなどの自尊感情の捉え方についての先行研究から「自尊感情とは何か」を明らかにし、子供の自尊感情を高めるための5観点（「自分への気付き」「自分の役割」「自分の個性と多様な価値観」「他者とのかかわりと感謝」「自分の可能性」）を設定した。また「自尊感情を高めるための発達段階に応じた指導上の留意点」（試案）を作成した。

## (2) 2年次（平成21年度）の研究成果

### 自尊感情の定義付け、自尊感情の傾向を客観的に把握する「自己評価シート」の開発

東京都では、「自尊感情」や「自己肯定感」を次のように定義した。

「自尊感情」とは、

自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での「自分」を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち

「自己肯定感」とは、

自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情

また、子供の自尊感情の傾向を把握する「自己評価シート」（質問項目 32 項目）」を開発し、自尊感情の傾向を踏まえて指導の方向性を検討するために「自尊感情や自己肯定感を高める指導上の留意点」を作成した。そして、その有効性を第Ⅱ期（児童期前期 6 歳～10 歳）から第Ⅲ期（児童期後期～思春期前期 11 歳～14 歳）の児童期において検証し、自尊感情や自己肯定感を高めるための指導事例【小学校版】としてまとめた。研究成果については研究概要（リーフレット）を作成し、配布した。（都内公立学校に各 1 部配布 3,500 部作成）

## (3) 3年次（平成22年度）の研究成果

### 自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」及び発達段階に応じた指導方法の開発

2年次（平成21年度）に自尊感情の傾向を適切に把握する方法として開発した「自己評価シート」（質問項目 22 項目）について、さらに因子分析を進めた結果、自尊感情を構成する因子を5因子から3因子（「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」）に確定し、22 項目の質問項目を有する「自己評価シート」を決定した。そして、「自己評価シート」の有効性を検証した。

また、子供の自尊感情の傾向分析を行い、自尊感情を構成する3因子（以下、「自尊感情の3つの観点」と表記。）（図1）による傾向を把握できるようにするとともに、「自尊感情や自己肯定感を高める指導上の留意点」を改訂し、自尊感情の傾向を踏まえた指導の方向性を示した。さらに、自尊感情や自己肯定感を高める教育の推進に活用できる指導資料【基礎編】を作成し、都内公立学校・園の全教員を対象に配布した。

## 4 4年次の研究

### (1) 研究のねらい及び研究仮説

これまでの研究成果を踏まえ、4年次の研究では、研究のねらい及び研究仮説を次のように設定した。



図1 自尊感情を構成する3因子【確定因子】

※ 子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料「自信 やる気 確かな自我を育てるために」【基礎編】（平成23年3月）から

**〔目指す子供像〕**

すすんで自分のよさを発見し、自分をかけがえのない存在だと思い、自信をもって行動する子供

**〔研究のねらい〕**

子供の自尊感情や自己肯定感を高めるため、自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」を開発するとともに、学校・園の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組の実施及び効果検証を行う。

**〔研究仮説〕**

子供の自尊感情の傾向を把握し、学校・園の教職員の共通理解の下に、教育活動全体を通して自尊感情を高めるための取組を意図的・計画的・組織的に推進することによって、子供は、すすんで自分のよさを発見し、自分をかけがえのない存在だと思い、自信をもって行動するようになるだろう。

**(2) 研究の主な視点**

次の3つの視点について、東京都教職員研修センター（以下、「センター」と表記。）、研究協力大学（以下「慶應義塾大学」と表記。）、研究協力校4校が連携し、4年次の研究を進めることとした。

**ア 自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発**

3年次（平成22年度）までの研究では、子供の自尊感情の傾向を把握するための「自己評価シート」を開発したが、子供の発達段階や障害等の様々な状況により、子供自身で自己評価を行うことが難しいという実態があった。そこで、4年次（平成23年度）の研究では、研究協力校（特別支援学校等）における児童・生徒の行動観察や「自己評価シート」を実施し、それらの相関を調べるなどにより、自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」（以下、「他者評価シート」と表記。）を開発した。

これまで、子供の自尊感情を把握する方法の一つとして子供自身による自己評価を実施していたが、このシートを活用することで教師等による他者からの評価を可能にするものと考えた。

**イ 学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組の実施及び効果検証**

研究協力校の児童・生徒を対象に「自己評価シート」を年間3回実施し、自尊感情の傾向を把握した。その結果を踏まえ、日常の授業や学校行事等、学校の教育活動全体を通して意図的・計画的・組織的に子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育を推進する取組を実施した。具体的には、全体計画や年間指導計画等の指導計画を作成するとともに、学校の推進体制を整備した。そして、教科等における学習内容の取扱いや指導方法の工夫を継続的に行った。これらの実践を受け、事前・事後の子供一人一人の自尊感情の傾向を比較し、その取組の効果を検証した。

**ウ 自尊感情の高低に関連する要因に関する調査**

自尊感情の高低に関連する要因を調査するために、まず、研究協力校の児童・生徒を対象に「自己評価シート」を実施し、個別の自尊感情の傾向を分析した。次に、先行研究や

研究協力大学によるこれまでの調査研究等から自尊感情の高低に関連すると考えられる、規範意識、親子（保護者）関係、学校適応、友達関係、社会性に関する項目について、研究協力校の児童・生徒を対象に質問紙法で調査を実施し、児童・生徒の自尊感情の傾向と規範意識等との関連を調査した。また、教師による児童・生徒の行動観察を併せて実施することにより、自尊感情の高低に関連する要因について分析した。

### 第3 研究の方法

本研究は、慶應義塾大学による調査研究及び研究協力校等における実践研究、センターがこれまで行ってきた基礎研究を基に、実践事例等の開発を行ってきた。今年度は、「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」研究協力校として、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の各校種から各1校を指定し、各学校の特色を生かした研究が進められるよう、センターが研究協力大学及び研究協力校の役割を明確にし、研究を進めた。

#### 1 慶應義塾大学及び研究協力校4校との共同研究

自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情を把握するための方法を開発する基礎研究及び開発研究、また、自尊感情の高低に関連する要因を把握するための調査研究などを、慶應義塾大学や研究協力校4校と共同で研究を推進した。

また、慶應義塾大学教職課程センター伊藤美奈子教授（教育学、臨床心理士）、慶應義塾大学文学部心理学専攻山本淳一教授（臨床心理士）を中心に、発達心理学や特別支援教育等の専門的な視点から調査研究等を進めた。

#### 2 研究協力校4校における実践研究

自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発についての基礎調査を実施した。また、学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組についての実践研究を行った。さらに、慶應義塾大学と連携し、自尊感情の高低に関連する要因に関する調査を実施した。以下の表1に、三者の研究内容について整理して示した。

表1 本研究におけるセンター、研究協力大学、研究協力校の研究内容

	(1) 自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」の開発	(2) 学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組
東京都教職員研修センター 基礎研究・開発研究	ア 「他者評価シート」の開発に関する基礎研究・開発研究 イ 指導の改善に資する「指導資料」【発展編】の作成と普及・啓発	ア 規範意識、親子関係等の自尊感情の高低に関連する要因についての基礎研究 イ 「自己評価シート」による自尊感情の傾向に応じた実践事例の開発
慶應義塾大学 調査研究	ア 「他者評価シート」の開発に関する基礎研究・開発研究 イ 「他者評価シート」と「自己評価シート」との相関等についての分析	ア 規範意識、親子関係等の自尊感情の高低に関連する要因を把握するための調査研究 イ 研究協力校における調査と分析を踏まえた助言
研究協力校4校 実践研究	ア 「他者評価シート」の開発に関する基礎調査 イ 「自己評価シート」の調査・分析を基に、子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導の手だてを取り入れた実践研究	ア 全体計画及び年間指導計画等の作成、学校の推進体制の整備などについての検討・実践 イ 指導資料【基礎編】の研究成果を基に、各教科等における学習内容の取扱いや指導方法の工夫についての実践研究

## 第4 研究の内容

### 1 自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向の把握

特別支援学校や特別支援学級等の児童・生徒や就学前の幼児等、「自己評価シート」による自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握することを目的として、自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」を開発した。

#### (1) 第三次実施計画策定の基本的な考え方及び「現状と課題」と「改善の方向」

「他者評価シート」の開発に当たっては、東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画（以下、「第三次実施計画」と表記。）を踏まえ、今後の特別支援教育を推進するための取組の参考となるよう研究を進めた。第三次実施計画策定の基本的な考え方は次のように示されている。

##### <第三次実施計画策定の基本的な考え方>

##### (1) すべての学校で実施する特別支援教育の推進

第三次実施計画においては、障害のある幼児・児童・生徒一人一人の障害の種類や程度に応じた専門的な教育を行い、幼児・児童・生徒一人一人の成長・発達を最大限に伸ばせる教育環境の更なる整備・充実に努めます。

##### (3) 自立と社会参加を目指す特別支援教育の推進

都教育委員会は、自立と社会参加に必要な知識・技能や働く意欲などを育てることは学校教育の使命であり、障害のある人々の自立と社会参加は共生社会の実現に向けて重要な意義を持つと考えます。

東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画（東京都教育委員会 平成22年11月）  
第4章 第三次実施計画の基本的な考え方、2 第三次実施計画策定の基本的な考え方 より抜粋

また、第三次実施計画の中から、本研究と関連する現状や課題の一部を以下に示す。

##### 【現状と課題】

平成15年度に都教育委員会が都内すべての公立小・中学校を対象に実施した調査では、「小・中学校の通常の学級には、特別な支援を必要とする児童・生徒が4.4%在籍している」との結果を得ました。一方で、平成21年度の自閉症・情緒障害学級（固定学級）の在籍及び情緒障害等通級指導学級の利用の実態を見ると、いずれかの学級に在籍又は利用する児童・生徒の占める割合は、義務教育段階（公立学校）の児童・生徒全体の0.6%程度です。

したがって、こうした数値や近年の特別支援教育への理解の進展等に基づけば、発達障害の児童・生徒に対する支援のニーズは、今後も一層高まることが推測されます。

##### 【改善の方向】

発達障害の児童・生徒の場合、集団生活や対人関係において生じる様々な困難が、本人の自尊感情の低下、焦燥感の高まり、自信の喪失などにつながり、学校生活への不適応や不登校などの深刻な二次障害を引き起こすことがあります。

また、発達障害に関する適切な理解や支援の共通理解がないと、周囲の人々もストレスを高めることになり、それがいじめやからかい等に波及することも懸念されます。このため、発達障害の児童・生徒をめぐっては、本人及び周囲の人々が、対人関係上のトラブルやストレスを生じさせないような工夫等を行うことが大切です。

東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画（東京都教育委員会 平成22年11月）  
第3章 区市町村における特別支援教育推進体制の整備、  
1 小・中学校における発達障害の児童・生徒に対する新たな特別支援教育推進体制 より抜粋

特別支援教育の推進における現状と課題などから分かるように、子供一人一人の可能性を最大限に伸ばするためには、自尊感情や自己肯定感を高めるための教育を充実させることが必要である。このことにより、子供は、対人関係が良好になったり、一人一人が自信をもてるようになったりするなど、安定した学校生活を送ることが期待できるようになると考える。



(2) 「他者評価シート」の開発とその活用

ア 「他者評価シート」の開発に当たって

自尊感情や自己肯定感の自己評価を行うことが難しい子供については、教員等が実施する「他者評価シート」を開発した（13 ページ参照）。開発に当たっては、研究協力校（特別支援学校）における子供の行動観察から関連する学習活動等がどの場面でどのように展開されているのかを把握した。

表2 自尊感情観察表・記入例

	場面（教科、個別場面、集団場面）と様子	指導の工夫	留意点
A 自己評価・自己受容	・納得して自分から活動を切り替えた	・写真カードで活動を示す	・焦らせないようにする
B 関係の中の自己	・友達の遊びに興味をもつようになった	・遊びが共有できる場の設定	・児童間の関わりを見守る
C 自己主張・自己決定	・やりたいことを伝えられるようになった	・文字ボードを活用する	・安心感を与える

具体的には、自尊感情の3つの観点に基づき、表2のように、児童・生徒の自尊感情や自己肯定感

に関わると考えられる行動等を、各教科等の場面に応じて観察・記録を実施した。

イ 「他者評価シート」の構成

「自尊感情観察表」に集約された児童・生徒の行動観察の記録は、教職員研修センターにおいて、KJ法的な手法により分類・整理し、24項目にまとめた。そして、この24項目を「他者評価シート」の項目とした。

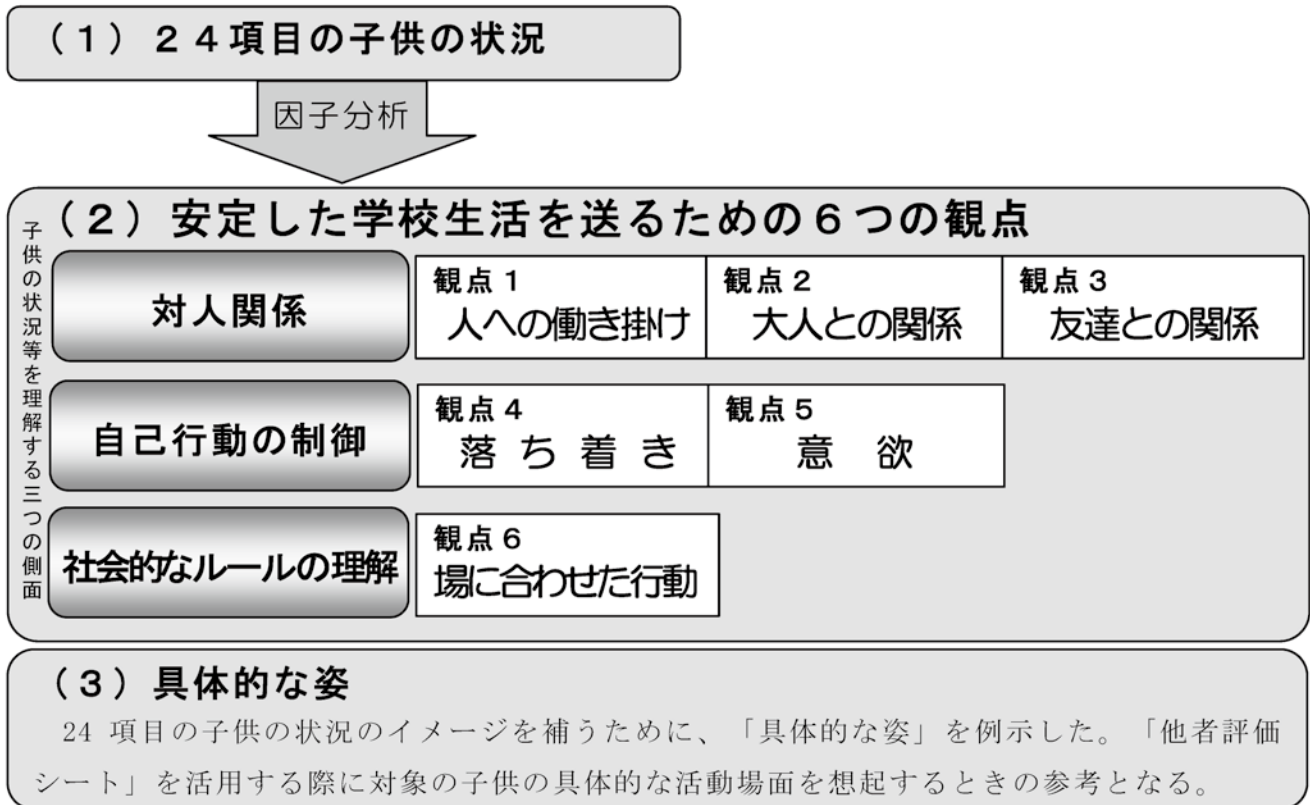
表3 「他者評価シート」の「安定した学校生活を送るための6つの観点」及び「24項目」

No.	安定した学校生活を送るための6つの観点	24項目
1	①人への働き掛け	自分から友達に働き掛ける。
2		日常的に交流の少ない相手にも関わる。
3		自分の思いや意見を何らかの手段で表現する。
4		集団の中で意欲的に行動する。
5	②大人との関係	特定の大人を信頼して心を開く。
6		大人との関わりを受け入れる。
7		自分から身近な大人に関わる。
8	③友達との関係	友達との関わりを受け入れる。
9		友達のことを考えて発言する。
10		友達のことを考えて行動する。
11	④落ち着き	自分から気持ちを立て直す。
12		これまでできなかったことに取り組む姿勢が見られる。
13		一つのことを最後まで取り組む姿勢が見られる。
14		自分の行動を自分で決める。
15	⑤意欲	肯定的な言葉掛けにより安定する。
16		肯定的な言葉掛けにより嬉しそうにする。
17		新しいことができると嬉しそうにする。
18		肯定的な言葉掛けにより次への意欲につながる。
19	⑥場に合わせた行動	相手の要求を受け入れる。
20		相手の指示を受け入れる。
21		ルールを守って行動する。
22		集団の雰囲気になじんでいる。
23		集団の活動に合わせて行動する。
24		状況に応じて臨機応変に行動する。

この24項目は、単に子供の自尊感情の傾向を把握することに留まらずに、指導の手だてとして活用することを目的として、慶應義塾大学文学部心理学専攻 山本淳一 教授の助言を受け、慶應義塾大学で因子分析を実施した。その結果、24項目を、「安定した学校生活を送るための6つの観点」として、「人への働き掛け」「大人との関係」「友達との関係」「落ち着き」「意欲」「場に合わせた行動」に整理した。

「他者評価シート」の構成は、図2に示すとおり、子供の状況を示す「24項目」、「安定した学校生活を送るための6つの観点」、24項目の子供の状況のイメージを補うための「具体的な姿」とした。さらに、6つの観点については、「対人関係」、「自己行動の制御」、「社会的なルールの理解」の3つの側面に分類し、子供の状況等を理解するための視点の一つとした。

図2 「他者評価シート」の構成



「他者評価シート」は、自尊感情の3つの観点に基づき、子供の行動観察を基に開発したシートである。教員は、子供の行動を観察し、自尊感情の傾向を把握することで、子供の姿を捉え直すことができる。なお、「他者評価シート」の24項目は、自尊感情を測定する尺度そのものではないものの、自尊感情の傾向を把握するための行動観察シートとし、「自己評価シート」を補完するシートとして活用できるようにした。

#### ウ 「他者評価シート」で把握する方法

「他者評価シート」を活用して子供の自尊感情の傾向を把握するに当たっては、24項目に示された状況だけで判断するのではなく、一人一人の子供の姿を、6つの観点で捉え、各項目のイメージを補う「具体的な姿」で子供の状況について捉え直すことが大切である。この際に、「対人関係」「自己行動の制御」「社会的なルールの理解」の側面からも理解を深めることができる。その結果、指導の手だてを焦点化し、指導に生かすことができるようになる。子供たちにとって、教育環境が整備されることにより安定した学校生活を送ることが期待できる。

#### (7) 「他者評価シート」を活用して子供の状況を把握する。

- a 「他者評価シート」（13ページ 表4）を複写したり、教職員研修センターのホームページからダウンロードしたりして、子供の人数分の「他者評価シート」を用意する。

- b 授業中や休み時間などの子供の現在の状況について教員が回答する。
- c 各項目を読み、「4 あてはまる」「3 どちらかというにあてはまる」「2 どちらかというにあてはまらない」「1 あてはまらない」の中から、子供の状況に近い番号に○を付ける。
- d 各項目には、イメージを補うために「具体的な姿」を参考にする。二つずつ記載されている具体的な姿のどちらか一つ、あるいは、両方が満たされていない訳ではなく、対象の子供の具体的な活動場面等を想起する際の参考例として活用する。

(イ) 結果を把握し、子供の理解を深める。

- a 「他者評価シート」の結果は、単に得点の高低を見るのではなく、指導の手だてとなるように活用する。
- b 把握の方法は、各項目の回答結果を集計する。集計には（図3）の集計表を用いる。
- c 集計結果は、レーダーチャート（図4）に表され、6つの観点の傾向を把握することができる。
- d 観点や得点の高低に着目する場合には、個別指導計画やアセスメント（標準化された発達検査等を用いて、児童・生徒の障害の成長・発達の段階や技能水準等を把握すること）等を踏まえた上で指導の手だてにつなげる。

	1 自分から友達に働き掛ける	2 日常的に交流の少ない相手にも関わる	3 自分の思いや意見を何らかの手段で表現する
1 (例)Aさん	4	2	3
2			
3			

図3 集計表

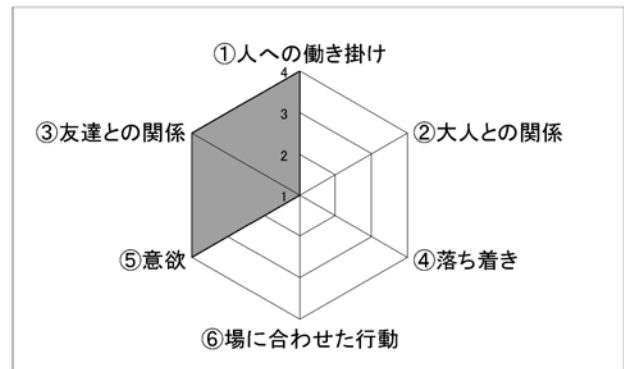


図4 レーダーチャート

(ウ) 指導の手だてを焦点化し、指導に生かす。

- a 担任等が実施する「他者評価シート」の結果を基に、指導の手だてを焦点化する。
- b 得点の低い観点や項目に着目した場合には、「具体的な姿」を参考にし、該当すると考えられる学習活動や行動を焦点化し、指導の手だてとする。

(イ) 全ての子供の個性をより理解するために活用する。

- a 幼児・小学校低学年をはじめ、自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握する際に活用する。
- b 子供一人一人の個性をより理解するためのシートとして、全ての子供に活用ができる。
- c 「具体的な姿」（13 ページ 表4）は、教員の振り返りシートとして活用することができる。例えば、「具体的な姿」と同様の場面や姿などが観察されたか、これまでの指導が目指す子供の姿にどの程度生かされているのかなど、自己の指導の振り返りとしても活用することができる。

表4 自尊感情の傾向を把握するための「他者評価シート」

質問に対して、記名をした子供の状況に近い数字に○を付けてください。

「他者評価シート」実施日 年 月 日 (No. )

「あてはまる」場合は4、「どちらかというあてはまる」場合は3、「どちらかというあてはまらない」場合は2、「あてはまらない」場合は1を○でかこんでください。

No	観点	項目	具体的な姿				
		あてはまる	どちらかというあてはまる	どちらかというあてはまらない	あてはまらない	該当する□にチェックをして、自己の指導を振り返りましょう。 □は、各項目のイメージを補うための具体的な姿としました。対象の子供の活動場面を想起する際の参考としてください。	
1	① 人への働き掛け	自分から友達に働き掛ける。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 自分から友達に話し掛けたり、一緒に遊んだりしている。 <input type="checkbox"/> 友達の使っている物を貸してほしい時や友達と遊びたい時など、自分から友達に言葉掛けなどをしている。
2		日常的に交流の少ない相手にも関わる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 学校に来た人などに挨拶している。 <input type="checkbox"/> 学級以外の教員や友達に会った時に、相手の質問に応じたり、話し掛けたりしている。
3		自分の思いや意見を何らかの手段で表現する。 (手段:表情、身振り、音声や簡単な言葉、補助手段など)	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> やりたいことや、やって欲しいこと、欲しい物などを、表情や身振りで相手に伝えている。 <input type="checkbox"/> やりたいことや、やって欲しいこと、欲しい物などを、音声や簡単な言葉で表現している。
4		集団の中で意欲的に行動する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> みんなの前に出て活動に参加している。 <input type="checkbox"/> 友達や教員の動きを見て、自分でも挑戦している。
5	② 大人との関係	特定の大人を信頼して心を開く。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 担任や保護者など特定の大人が近くにいることで、落ち着いて取り組んでいる。 <input type="checkbox"/> 担任や保護者など特定の大人に自分の気持ちを伝えたり、大人の話の話を聞いたりしている。
6		大人との関わりを受け入れる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 担任以外の教員などの大人の話の話を聞いている。 <input type="checkbox"/> 担任以外の教員などの大人からの言葉かけで、一緒に活動している。
7		自分から身近な大人に関わる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 自分から家族や教員に、話し掛けたり、遊んだりしている。 <input type="checkbox"/> 自分の知っている大人に話し掛けたり、相手の顔を見たりしている。
8	③ 友達との関係	友達との関わりを受け入れる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 友達の話を聞いている。 <input type="checkbox"/> 友達からの言葉かけで、一緒に活動している。
9		友達のことを考えて発言する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 友達を励ましたり認めたりするなど、相手の気持ちになって言葉掛けをしている。 <input type="checkbox"/> やってはいけないことを注意するなど、友達のためになることを助言している。
10		友達のことを考えて行動する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 友達が困っているとき助けるなど、友達のためになることをしている。 <input type="checkbox"/> 友達の気持ちを察して、自分勝手な行動をしない。
11	④ 落ち着き	自分から気持ちを立て直す。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 気持ちの高ぶっているときなどに、自分で気持ちを落ち着かせている。 <input type="checkbox"/> 嫌なことや苦手なことなどに対して、気持ちを整理して取り組もうとしている。
12		これまでできなかったことに取り組む姿勢が見られる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 学習や係活動などで、一人で取り組めることが増えている。 <input type="checkbox"/> 教員や友達など、人の関わり方がよくなってきている。
13		一つのことを最後まで取り組む姿勢が見られる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 学習や係活動などで、分担の仕事を教員から指示を受けてやり遂げようとしている。 <input type="checkbox"/> 学習や係活動などで、分担の仕事を自分でやり遂げようとしている。
14		自分の行動を自分で決める。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 学習や係活動などで、やりたいことを自分で選択している。 <input type="checkbox"/> 学習や係活動などで、やることを分かって取り組んでいる。
15	⑤ 意欲	肯定的な言葉掛けにより安定する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 褒められることにより、気持ちが落ち着く。 <input type="checkbox"/> 失敗したり叱られたりして、気持ちが沈んでも、励まされることで気持ちが落ち着く。
16		肯定的な言葉掛けにより嬉しそうにする。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 褒められることにより、笑顔になったり、嬉しそうの様子が見られたりする。 <input type="checkbox"/> 自分の行いが認められることで、嬉しい様子を身体で表現している。
17		新しいことができる嬉しそうにする。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 新しい学習や活動などに取り組むことができたとき、笑顔になったり、嬉しそうな表情になったりする。 <input type="checkbox"/> これまでできなかったことができたとき、笑顔になったり、嬉しそうな表情になったりする。
18		肯定的な言葉掛けにより次への意欲につながる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 褒められることで、自分から次の課題に取り組もうとしている。 <input type="checkbox"/> 自分の行いが認められることで、学習や係活動などに意欲的に取り組む。
19	⑥ 場に合わせた行動	相手の要求を受け入れる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 欲しいものが友達と重なったときに、友達に譲っている。 <input type="checkbox"/> 自分の本意でなくても、友達や教員から頼まれたら、断らずに取り組む。
20		相手の指示を受け入れる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 授業中や授業以外のときに、教員の言うことに従っている。 <input type="checkbox"/> 自分の本意でなくても、教員や友達から言われたことを理解し、断らずに取り組む。
21		ルールを守って行動する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 身の回りのものを所定の場所に置いたり、列に並んで順番を待たたりするなど、決まりを理解して行動している。 <input type="checkbox"/> 他人の持ち物を勝手に使わないなど、してはいけないことを守っている。
22		集団の雰囲気になじんでいる。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 集団の活動の中で、友達がしていることに興味をもっている。 <input type="checkbox"/> 集団の活動の中で、友達と共に活動している。
23		集団の活動に合わせて行動する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 集団の活動の中で、早くやりたくても自分の順番を待っている。 <input type="checkbox"/> 集団の活動の中で、教員や友達を見て、みんなと合わせた動きをしている。
24		状況に応じて臨機応変に行動する。	4	3	2	1	<input type="checkbox"/> 予期しない事態になっても、気持ちを落ち着けて、状況に応じて行動している。 <input type="checkbox"/> 自分の順番でも困っている友達に譲ったり、自分の欲しい物でも下級生に譲ったりしている。

## 2 学校の教育活動全体を通じた意図的・計画的・組織的な取組

### (1) 実践方法

#### ア 各職層における役割の明確化

教育活動全体を通して意図的・計画的・組織的に推進するためには、各職層の役割を明確にし、取り組むことが重要である。

次の表5は、各職層の役割を一例として表したものである。なお、以下の役割、内容については、幼稚園でも同様に考えられる。

表5 自尊感情や自己肯定感を高める教育を推進するための各職層の役割（例）

職層	内容	具体的な内容
校長	学校経営方針の策定	・学校経営方針に自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の推進を位置付け、学校経営の方針を教員や地域等に周知する。
	学校の教育計画への位置付け	・学校の教育目標やそれを達成するための基本方針、指導の重点などに具体的な取組を位置付け、教育課程を編成・実施する。
	校内の推進体制の確立	・学校教育全体で取り組むための組織を確立し、担任、学年、学部間の連携が図れるよう校務分掌での役割を明確にする。
	教育課程の実施における管理、計画・体制の改善	・学校経営方針で示された内容に沿って推進状況を適時確認し、PDCAサイクルで教育課程を管理する。
副校長	校長の学校経営方針の具現化	・校長の学校経営方針の具現化を図るために、教育活動の実施計画の立案について、主幹教諭や主任教諭に指示するとともに、教員への具体的な指導・助言を行う。
	目標達成に向けた進行管理	・PDCAサイクルに基づいた円滑な進行管理を行い、指導計画の見直しや組織体制の充実を図るための方策を提案する。
	教員の人材育成	・教員のキャリアに応じて、校務分掌で果たす役割を明示し、自尊感情を高める観点から、授業及び学級経営等について具体的な指導・助言をする。
	家庭・地域等との連携	・家庭・地域、関係機関の意見や要望を的確に把握し、教育活動に生かしたり、学校の取組についての理解を促したりして、学校・家庭・地域の連携が重要であることを伝える。
主幹教諭	各校務分掌の進行管理	・各校務分掌の職務内容に応じて、学校の推進計画に基づいた分掌の計画の立案や教員の役割を明確にし、円滑に実施できるよう進行管理をする。
	指導計画の作成と改善	・実施時期の調整や指導内容・方法等の検討を行い、全体計画や年間指導計画等を作成する。 ・実施状況を確認し、指導内容・方法、実施体制等について改善の方策を講じる。
全ての教員	自尊感情や自己肯定感を高めるための各教科等の指導	・学習内容の取扱いや指導方法を工夫し、授業改善を図る。
	学年・学級経営の充実	・学校の教育目標に基づき、学年経営・学級経営計画を作成し、学年集団・学級集団づくりの基本方針や学級活動等を検討する。 ・家庭・地域から得た情報を学校全体で受け止めるようにする。
	教育環境の整備	・各校務分掌と連携を図り、教員相互、教員と子供、子供相互の人間関係が円滑になるような教室環境、言語環境を含めた校内の環境づくりを行う。

## イ PDCAサイクルの実施

学校の教育活動全体を通して意図的・計画的・組織的に取り組むためには、実施計画の立案や評価の時期、改善の方向性等を明確に示して、校内で共通理解を図りながら進めることが大切である。図5は、子供の自尊感情や自己肯定感を高めることを目的として取り組む際のPDCAサイクルの一例を示したものである。各学校・園においては、実態等に応じた校務分掌を組織し、PDCAサイクルに基づいて計画的かつ組織的に教育活動全体で取り組むことが必要である。

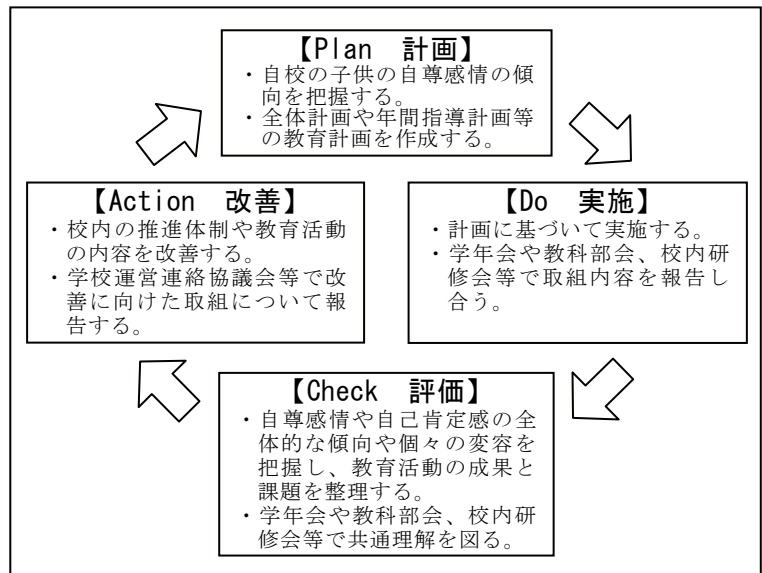


図5 自尊感情や自己肯定感を高めるためのPDCAサイクル（例）

## ウ 計画の作成

学校の教育活動全体で意図的・計画的・組織的に指導するためには、自尊感情や自己肯定感を高めるための教育計画を作成する。計画を作成する際には、校長の学校経営計画に基づき、取組が意図的・計画的・組織的に行われるよう、自尊感情の3つの観点を踏まえて各教科等の指導計画や校内研修計画等を見直す必要がある。

### (7) 全体計画の作成

まず、「自己評価シート」や「他者評価シート」を活用するなどして各学校の子供の自尊感情の傾向を把握し、その傾向を踏まえた指導を行うための校務運営組織を整えることが必要である。そして、各教科等を横断した「自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた全体計画」（16 ページ 図6）を作成し、教員が共通理解の下で実施していくことが大切である。

### (4) 年間指導計画の作成

次に、全体計画に基づき、各教科等において「自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた年間指導計画」（17 ページ 表6）を作成する。各教科等の学習内容から自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる内容を重点的に取り扱ったり、指導方法を工夫したりして、意図的・計画的に子供の自尊感情の傾向を踏まえた指導ができるように単元（題材）を設定していくことが大切である。また、「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」（30 ページ 表10）を参考にし、各学年における各教科等の指導内容に自尊感情や自己肯定感を高めるための視点を位置付ける。

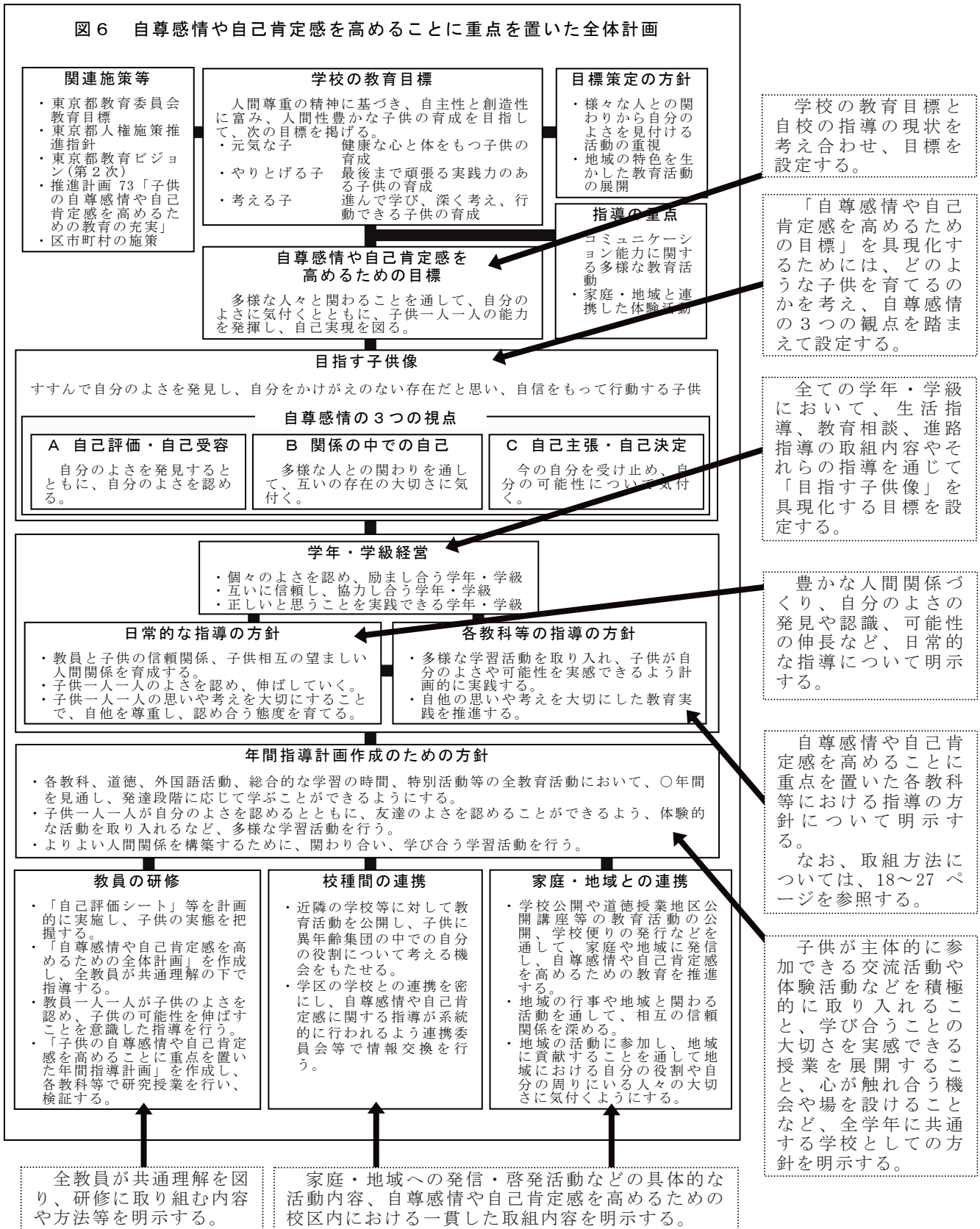
### (7) 各教科等の指導計画の作成

授業を展開する際には、年間指導計画に沿って各教科等の単元（題材）の目標や内容等を踏まえ、目指す子供像を明確にし、指導の視点や留意点を設定する。また、指導計画には、「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」を参考に、自尊感情の3つの観点を指導計画に意図的・計画的に位置付け、指導を行う。

(I) 自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた全体計画作成の手引き

ここでは、「自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた全体計画」の作成方法を示す。作成に当たっては、各項目の説明に従って内容を検討する。

図6 自尊感情や自己肯定感を高めることに重点を置いた全体計画







## (2) 実践内容

各教科等の指導では、自尊感情や自己肯定感を高めるという視点で、各教科等の日々の授業を充実させていくことは大切である。各学校で作成した全体計画、年間指導計画に基づいて取り組むとともに、「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」（30 ページ 表 10）を参考にしながら、「学習内容」及び「指導方法」を踏まえ、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において検証授業を行った。

### ア **学習内容**を習得させることで自尊感情や自己肯定感を高める学習

各教科等の学習には、自尊感情や自己肯定感と関連の深い内容をもつものがある。この学習内容を習得させることが子供の自尊感情や自己肯定感を高めることにつながる。また、道徳や特別活動等には、学習のねらいそのものが自尊感情や自己肯定感を高めることにつながるものがある。各学年、各教科等における年間の学習の中で、こうした内容を年間指導計画の中に位置付けて計画的に取り組むことが大切である。

表 7 自尊感情や自己肯定感と関連の深い学習内容例

学習内容	各教科等における例
自己の成長を振り返る学習	<b>&lt;特別活動&gt;</b> 卒業式、終業式、修了式などを節目とし、それまでの生活や学習を振り返り、自分の成長を確かめられるようにする。
	<b>&lt;国語&gt;</b> 学期末や年度末などに、それまでの生活や学習について振り返り、作文等を書くことで自分の成長を実感できるようにする。
自己の個性を発見する学習	<b>&lt;道徳&gt;</b> 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求できるようにする。
	<b>&lt;音楽、図画工作、美術&gt;</b> 表現や鑑賞など幅広い活動を通して、自分の表現のよさや個性について気付くようにする。
生命の尊さを考える学習	<b>&lt;道徳&gt;</b> 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重できるようにする。
	<b>&lt;生活、理科&gt;</b> 飼育・栽培活動や、生命について理解を深める学習を通して、生命あるものへの愛着をもち、大切にしていこうとする態度を育てるようにする。
友情の尊について考える学習	<b>&lt;道徳&gt;</b> 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合えるようにする。
	<b>&lt;特別活動&gt;</b> 学級や学校の友達と信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活を送れるような活動を行う。
主体的に進路を考える学習	<b>&lt;特別活動、総合的な学習の時間&gt;</b> 「職場体験」「インターンシップ」「ボランティア体験」などの体験活動等を通して、勤労や職業に対する理解や認識を深めるようにする。
	<b>&lt;社会&gt;</b> 「産業と人々の生活」「地域の人の仕事調べ」などの学習を通し、様々な職業や生き方があることや、働くことの大切さや大変さを理解するようにする。
成就感や連帯感を味わえる学習	<b>&lt;特別活動&gt;</b> 運動会、合唱祭、学習発表会等に向けて、日頃の学習活動の成果を発展させ、友達と協力しながら創造的に取り組めるようにする。
	<b>&lt;特別活動&gt;</b> 係活動や児童（生徒）会活動を通して、信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるようにする。
他者との協力と協同の大切さを学ぶ学習	<b>&lt;特別活動&gt;</b> 学校行事、係や当番活動、児童（生徒）会活動を通して、信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるようにする。
	<b>&lt;音楽、図画工作、美術&gt;</b> 合唱や合奏、共同で行う創造活動等を通して、互いの個性を生かし合い協力する喜びを味わえるようにする。

イ **指導方法**を工夫することで自尊感情や自己肯定感を高める学習

学習を通して、「できた」「分かった」と実感をもてたり、教員や友達に「認めてもらった」、「友達に教えることができた」と友達と学ぶよさを感じたりすることができたとき、子供の自尊感情や自己肯定感が高まる。これは、全ての学習において共通して言えることである。教員自身が指導方法を振り返り、より効果的な指導方法を工夫することが大切である。

表 8 自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫例

指導の工夫例	
友達と関わりながら学ぶ学習形態や学習方法の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習形態 一斉学習や班学習・ペア学習など、様々な学習形態を学習に取り入れ、友達と関わりながら学べるようにする。</li> <li>○学習方法 ディベートやポスターセッションなど、様々な学習方法を学習に取り入れ、友達と関わりながら学べるようにする。</li> </ul>
主体的に取り組める教材・教具の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○関心・意欲を高める 子供の生活に関わりの深い教材・教具や見て理解できる教材・教具を活用することで、学習への関心・意欲を高める。</li> <li>○理解を助ける 具体的に操作ができるものや見て理解できるもの、ワークシートなどの教材・教具を活用することで、学習の理解を助ける。</li> <li>○コミュニケーションを活発にする 黒板や電子情報ボード、ワークシートや付箋紙などの教材・教具を活用し、子供同士の情報交換や意見交換などのコミュニケーションを活発にする。</li> <li>○学習の成果を確かめる 取組カードや振り返りカードなどの教材・教具を活用し、毎時間もしくは単元の学習を通して成果を確かめられるようにする。</li> </ul>
学習の成果を自ら実感できる評価の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○机間指導で子供との対話 机間指導を通して子供と対話をしながら、学習状況を把握し、できたことを賞賛したり、つまづきを支援したりする。</li> <li>○ノートやワークシートで学習状況を把握 ノートやワークシートから、授業中では発言できなかった子供の考え方や発問等を把握し、評価する。</li> <li>○学習カードで自己評価 子供自身が、学習カード等を使って、学習の達成状況を振り返り、次の目標をもてるようにする。</li> <li>○面接で理解の促進 授業中にねらいが達成できなかった子供に対して、次の授業までに面接し、理解を促す。</li> <li>○観察で学習過程を把握 学習結果だけでなく、授業中の子供を観察し、学習過程も重視する。</li> <li>○作品やレポートで把握 作品やレポート等で、一人一人のよさや可能性を把握し、評価する。</li> </ul>
地域と関わりながら学びを深める体験活動の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域の高齢者と昔遊びで交流 地域の高齢者と、昔遊びの交流会をする。</li> <li>○地域清掃活動 地域の美化活動に取り組む。生徒会活動やボランティア活動としても取り組める。</li> <li>○幼児に読み聞かせ 地域の幼稚園や保育園に出向き、幼児に絵本などの読み聞かせをする。</li> <li>○小・中学校で補習教室の補助 近隣の小・中学校の補習教室の補助をする。都立高等学校の教科「奉仕」の活動としても取り組める。</li> <li>○学校行事での異年齢交流 地域の幼児や児童を運動会などの学校行事に招く。</li> <li>○卒業生から上級学校について聞く 進路学習の一環として、卒業生から上級学校について話を聞く機会を設定する。</li> </ul>
課題探究型の学習や体験活動の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自ら設定した課題について調査・研究し、成果を発表する学習を通して、主体的に探究する態度と力を身に付ける。</li> <li>○企業等における就業体験を通して、社会に関する見識を深め、社会貢献の志を高める。</li> </ul>

(3) 実践事例

ア **学習内容**を習得させることで自尊感情や自己肯定感を高める実践事例

(7) 自己の成長を振り返る学習を通して高める  
【特に重点とする観点 「A 自己評価・自己受容」】

「自己の成長を振り返る学習」とは  
これまでの生活を振り返り、自分の成長や変化について自分自身で考えたり、友達に教えてもらったりして、気付かなかった自分の成長を実感できるようにする学習である。主に観点「A 自己評価・自己受容」の内容に当たる。

各教科等における「自己の成長を振り返る学習」の例

<p>&lt;教科等&gt; 特別活動 卒業式、終業式、修了式などを節目とし、それまでの生活や学習を振り返り、自分の成長を確かめられるようにする。</p>	<p>&lt;教科等&gt; 国語 学期末や年度末などに、それまでの生活や学習について振り返り、作文等を書くことで自分の成長を実感できるようにする。</p>
<p>&lt;教科等&gt; 体育 保健体育 心や体の機能やその発達について知り、自分の成長の過程を理解できるようにする。</p>	<p>&lt;教科等&gt; 公民（高等学校） 生涯における青年期の意義を知り、自己の成長の過程を理解できるようにする。</p>

**実践事例 1 小学校 第4学年 国語科**

<本実践の概要>  
班活動を取り入れ、努力して取り組んでいることについて互いに質問し、努力の成果を認め合うことで、自己の成長を振り返る活動を行う。

<内容の取扱い>  
**○教材を通して、自分の成長を振り返り、次への成長につなげる態度を育成する**  
・自分自身を見つめたり、他者から認められたりすることで、自分のよさを実感できるようにする。

**○相手の話を肯定的に受け止める態度を育成する**  
・「聞き手」は、「話し手」の話を肯定的に受け止めていることを伝えられるよう、相づちを打ったり賞賛したりしながら話を聞くよう声掛けをする。

- 1 単元名 「『今の自分』を話します」（東京書籍「新しい国語四上」）
- 2 単元の目標
  - ・伝えたいことがはっきり分かるように、自分の考えや具体的な事例を挙げて話す。
  - ・自分の体験と結び付けたり、自分の考えと比べたりしながら聞く。
- 3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての 知識・理解・技能
スピーチすることに興味をもち、自分の成長について考え、友達の成長について自分と比べながら聞こうとしている。	自分のことを振り返り、伝えたいことがよく分かる題材を選んでいく。 伝えたいことがはっきりと分かるように、具体的な事例や自分の考えを挙げながら話している。 友達が伝えたいことは何かを考え、自分と比べながら聞いたり、質問や感想を述べたりしている。	伝えたいことがよく分かるように話す内容を構成している。 相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話している。

4 単元の指導計画（全6時間）

時	学習活動
1	学習のねらいや流れを知る。自分を振り返り、スピーチの題材を考える。
2	伝えたいことの内容を決めてスピーチの内容を考え、スピーチメモを作成する。
3 本時	スピーチの題材、内容等について友達と助言し合う。 友達から助言を基に、スピーチメモを改善する。
4	スピーチメモを基に、スピーチ原稿を作る。 スピーチ原稿を使って、班で練習し助言し合う。
5・6	学級全体でスピーチをし、質問や感想を伝え合う。

5 本時の指導（本時3／6）

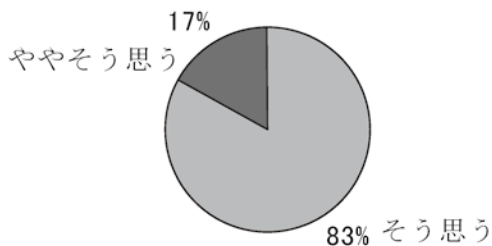
過程	学 習 活 動	○指導上の留意点 ☆評価（）評価規準 ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点
導入	(1) 本時のめあてと学習内容を知る。 ＜めあて＞ 「友達と助言し合い、スピーチメモを改善しよう」	○子供が主体的に学習を進められるように黒板に前時までの学習の流れを掲示し、学習の見通しをもたせる。
展開	(2) 前時までに考えたスピーチの題材や内容等について友達と助言し合う。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>＜話し手＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチの題材、内容、選んだ理由などを分かりやすく伝える。</li> <li>・聞き手の助言を聞き、質問に答える。</li> </ul> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>＜聞き手＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話し手のスピーチの題材、内容、選んだ理由などを聞いて、助言したり、質問したりする。</li> <li>・質問したカードを聞き手に渡す。</li> </ul> </div> </div> (3) 聞き手からもらった質問カードや前時までに書いたカード等を基にして、スピーチメモを改善する。	■友達の話を聞き、友達の成長について肯定的に受け止めた上で、助言したり質問したりするようにさせる。 【A 自己評価・自己受容 ※③努力の評価】  ■友達の話を、相づちを打ったり賞賛したりしながら聞くように促す。 【A 自己評価・自己受容 ②相互理解】 ☆友達が伝えたいことは何かを考え、質問したり助言したりすることができたか。（話す・聞く） ○スピーチメモをまとめられない児童には、「以前の自分→今の自分」という順序で組み立てるよう助言する。  ☆自分の成長がよく分かるように、内容や構成を工夫してスピーチメモを改善することができたか。（知・理・技）
まとめ	(4) 本時の学習を振り返り、次時のめあてをもつ。	○黒板に振り返りの観点を提示する。

※表中の○数字は、自尊感情の3つの観点の小観点を示しています。「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」(30ページ 表10)参照

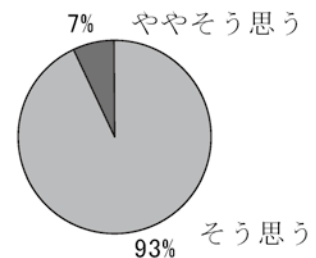
6 学習の効果

(1) 児童全体の変容

〈質問〉自分の成長を相手によく分かるように話すことができた。



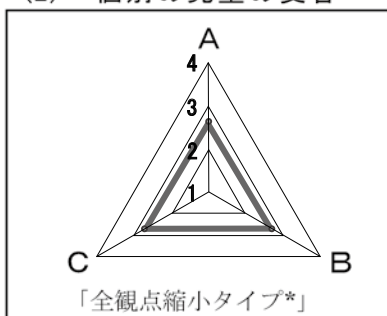
〈質問〉自分がこれからどうしていきたいかを話すことができた。



〈考察〉

単元のまとめに行ったアンケート調査では、2つの調査に対して、8～9割の児童が「そう思う」と回答していた。このことから、互いの成長について友達と伝え合うことを通して、自分では気付くことができなかった自分の成長に気付くことができたと考えられる。

(2) 個別の児童の変容



〈学習後の児童の感想〉

みんなと比べると僕にはできないことが多いなと思っていたけれど、1年生の頃と比べるとできることが多くなりました。

〈考察〉

他者と比べて自分を見つめていたが、子供の活動の具体的な場面を捉えて褒めることで、自分なりの成長を感じられるようになった。

\*タイプについては、指導資料〔基礎編〕13～15ページを参照

（学習内容を習得させることで自尊感情や自己肯定感を高める実践事例）

（イ） 生命の尊さを考える学習を通して高める  
【特に重点とする観点 「B 関係の中での自己」】

「生命の尊さを考える学習」とは  
生命について考え、自分や他者の存在の大切さに気づき、互いに認め合えるようにする学習である。主に観点「B 関係の中での自己」の内容に当たる。

各教科等における「生命の尊さを考える学習」の例

<p>＜教科等＞ 道徳</p> <p>生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重できるようにする。</p>	<p>＜教科等＞ 生活 理科</p> <p>飼育・栽培活動や、生命について理解を深める学習を通して、生命あるものへの愛着をもち、大切にしていこうとする態度を育てる。</p>	<p>＜教科等＞ 体育 保健体育</p> <p>健康・安全に関する理解を通して、自他の生命を大切にできるようにする。</p>
---	--	--

実践事例 2 中学校 第2学年 理科

＜本実践の概要＞  
本実践では、「卵生」と「胎生」について知り、動物による生存率の違いについて理解する学習を通して、今ある私たちの生命は、たくさんの人々に支えられて与えられたものであることについて考え、生命を大切にすることを養う学習活動を行う。

＜内容の取扱い＞  
○ 動物の生態について知ること、自分の生命について考える  
動物のからだや生命の誕生の様子について知ること、人間はたくさんの人々に守られ、支えられて生きている存在であることを気付かせ、一人一人の命を大切にしていこうとする態度を育てる。  
○ 班の中での話し合いや班同士の討論を取り入れ、互いの考えのよさに気付く  
班での話し合いでは、全員が参加できるように助言し、討論では生徒の考えのよいところを褒め、学級全体に広げようとする。

- 1 単元名 「動物の世界」
- 2 本時の目標
  - ・親が世話をしない動物や小さな動物は、外敵から狙われやすいので産卵数が多いことや、胎生は卵生より子の生存率が高いことを理解する。
  - ・哺乳類は、魚類や両生類、爬虫類のように成長と生存を偶然に任せるのではなく、親が外敵から守り成長を支えていくことを理解し、合わせてそのようにして守られてきた自分の生命について考える。

3 単元の評価規準

自然事象への関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
動物のからだのつくりと働き、動物の仲間に関する事物・現象に進んで関わり、それらを科学的に探究するとともに生命を尊重し自然環境の保全に寄与しようとする。	動物のからだのつくりと働き、動物の仲間に関する事物・現象の中に問題を見だし、目的意識をもって観察・実験などを行い、事象や結果を分析して解釈し、自らの考えを表現している。	動物のからだのつくりと働き、動物の仲間に関する事物・現象についての観察・実験の基本操作を習得するとともに、観察・実験の計画的な実施、結果の記録や整理など、事象を科学的に探究する技能の基礎を身に付けている。	動物のからだのつくりと働き、動物の仲間に関する事物・現象について基本的な概念、多様性や規則性を理解し、知識を身に付けている。

4 単元の指導計画（全 35 時間）

次	時	学 習 活 動
	1	「動物の飼育と観察」
1	2～6	「生物と細胞」細胞のつくり、単細胞生物と多細胞生物
2	7～20	「動物のからだのつくりと働き」消化と吸収、呼吸の働き、血液の循環、排泄のしくみ、刺激と反応、からだは動くしくみ
3	21～28 (23 本時)	「動物の分類」動物の分類、無脊椎動物
4	29～35	「生物の変遷と進化」脊椎動物の出現と進化、進化の証拠

5 本時の指導

過程	学 習 活 動 ・ 予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ☆評価 ( ) 評価規準 ■自尊感情や自己肯定感を高めるための 指導上の留意点等
導入	(1) イクラやタラコなどの卵は、どの魚から生まれてきたのか既習事項を整理する。	○人間の食物となっている卵を例にして、どの魚から生まれてきたのか整理させ、動物の産卵について興味をもたせる。
展開	(2) 動物の産卵数が、種によって違う理由を理解する。 ・ 食べられてしまう危険のある動物の卵は多い。 ・ 親が世話をしない動物は襲われる危険性があるので多い。	○個人で理由を考えさせた後、班で交流させて意見をまとめ、生徒の考えから正解を導くようにする。 ○様々な動物が、種の保存のために工夫して知恵を使っていること、それぞれに適合した形で進化してきたことを話す。
	(3) マグロとイワシの産卵数はどちらが多いか、個人で考える。 ・ マグロの方が強いので、イワシの方が多。	○マグロの方が産卵数が多いことを伝え、問題意識をもたせる。
	(4) 「マグロの方が体が大きいのに、なぜ産卵数が多いのか」について、班で考えをまとめ、討論を行う。	○班でまとめた考えは黒板に板書させ、学級全体で共有できるようにする。 ■班での話し合いでは全員が参加できるように助言し、討論では生徒の考えのよいところを褒め、学級全体に広げようとする。 【B 関係の中での自己 ※①他者理解】 ○「大きな強い魚でも生後すぐは小さく弱い魚で、むしろ成体になるまで時間がかかって生存率が低くなるため、産卵数が多い」ことを伝える。
まとめ	(5) 「卵生」と「胎生」について知り、生存率の違いについて理解する。	☆「卵生」と「胎生」について理解することができたか。（知・理） ■卵生と胎生の説明の中で、人間はたくさんの人々に守られ、支えられて生きている存在であることに気付かせ、一人一人の生命を大切にしていこうとする態度を育てる。 【B 関係の中での自己 ④支えの気付き】
	(6) 生命についての自分の考えをワークシートに記入する。	☆生命についての自分の考えをまとめているか。（思・表）

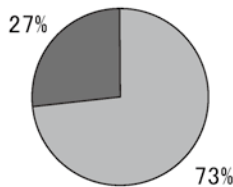
※表中の○数字は、自尊感情の3つの観点の小観点を示しています。「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」(30ページ 表10)参照

6 学習の効果

(1) 生徒全体の変容

【学習後の感想（自由記述）から】

それ以外の記述

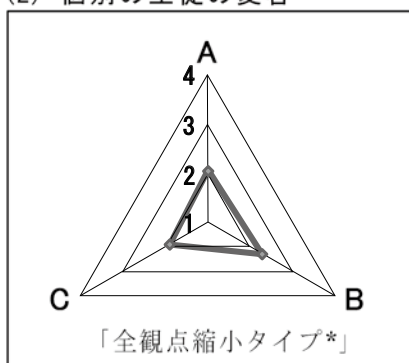


「自分の生命を大切にしていきたい」という趣旨の記述

〈考察〉

「この授業で、自分がいろいろな人に守られて生きてこられたことがよく分かった」などの記述があり、生命の大切さについて考えることができた生徒が多かったことがうかがわれる。

(2) 個別の生徒の変容



〈学習後の生徒の感想〉

生命は先祖代々受け継がれてきたもので、とても大切なものだと感じました。しっかり悔いのない生き方をして、次の世代に継いでいきたいと思います。

〈考察〉

生物の生きるための工夫や生き延びる難しさ等を学んだことから、生命をかけたがえのないものであることに気付き、大切に生きていこうとする気持ちをもつことができた。

\*タイプについては、指導資料【基礎編】13～15ページを参照

イ **指導方法**を工夫することで自尊感情や自己肯定感を高める実践事例

(ア) 友達と関わりながら学ぶ学習形態や学習方法の工夫  
【特に重点とする観点 「B 関係の中での自己」】

「友達と関わりながら学ぶ」とは

「自分が周りの人の役に立っている」「周りの人は大切な存在だ」ということに気付かせ、主に観点「B 関係の中での自己」を高めていく方法である。本実践では、友達と関わりながら学ぶことができるよう「学習形態」や「学習方法」の工夫に視点を当てた。

友達と関わりながら学ぶ「学習形態」や「学習方法」の工夫例

学習形態

○一斉学習

集団で思考し、多様な人の考えを交流することができる。

○班学習・ペア学習

話しやすい雰囲気をつくり意見交流を活発にし、考えを広げたり深めたりできる。

学習方法

○ディベート

設定したテーマについて一定の規則に従って行う討議で、活発な意見交流が期待できる。

○ポスターセッション

発表者と聴衆に分かれて、調べたことを伝えたり質疑をしたりして、意見交換をすることができる。

**実践事例3 高等学校 第2学年 総合的な学習の時間**

＜本実践の概要＞ 4人班でのワークショップ形式の活動を基本とし、KJ法的な手法などを使って、自由な発想で考えを出したり、友達の考えを理解したりできるようにしていく。

1 単元名（教材名）

「日本を救え！震災復興計画 ～今私たちにできること～」

本単元は公民科の科目「現代社会」で扱う「私たちの生きる社会」の学習から発展させた単元である。「現代社会における諸問題」等の学習を踏まえ、課題に対する望ましい解決の在り方について考案を深めさせる。

2 本時の目標

- ・震災復興をテーマに、様々な観点から課題を追究し、友達の考えに触れながら多面的・多角的に解決策を考えるとともに、今の自分ができることを明らかにする。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
東日本大震災後の諸問題に対して、その解決策を考えるとともに、今の自分ができることを考えようとしている。	KJ法的な手法を用いて、友達の様々な考えに触れながら、多面的・多角的に解決策を考えるとともに、今の自分ができることについて考え、表現している。	諸資料を様々なメディアを通して収集し、課題解決に役立つ情報を主体的に選択して活用している。	東日本大震災後の諸問題を理解している。

4 単元の指導計画（全6時間）

時	学 習 活 動
1・2	東日本大震災後の諸問題について理解する。
3・4	東日本大震災後の諸問題について、自己の課題をもち、諸資料を様々なメディアを通して収集し、課題に対する自分の考えをもつ。
5・6 本時	震災復興をテーマに、様々な観点から課題を追究し、友達の考えに触れながら多面的・多角的に解決策を考えるとともに、今の自分ができることを明らかにする。

5 本時の指導

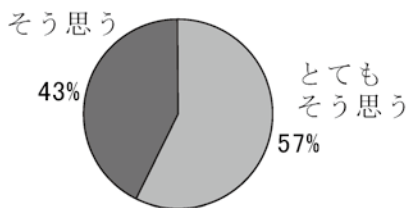
過程	学 習 活 動 ・ 予想される生徒の反応	○指導上の留意点 ☆評価 ( ) 評価規準 ■自尊感情や自己肯定感を高めるための 指導上の留意点等
導入	(1) ワークショップの手法を使い、震災復興計画を立てる学習をすることを教える。 (2) ワークショップの意義や進め方について学ぶ。	○「私たちの震災復興計画」をテーマに、具体的に次のような課題について考える。 ・被害額 16 兆 9,000 億円（内閣府発表）と言われる復興費用をどうやって集めるか ・放射性物質で汚染された地域をどうするか など
展開	(3) 班で自由に意見を出し合い、K J 法的な手法を使って話し合う。 ①テーマに沿って自分の考えを付箋紙に書く。 ②自分や友達の考えを比較し、似た考えをまとまりにしてグループ化する。（K J 法的な手法） ③グループ化されたそれぞれの考えに対する課題を書き、模造紙に貼る。 ④課題に対する解決策を付箋紙に書き模造紙に貼る。 ⑤解決策をグループ化する。 (4) 班で話し合ったことを発表する。	○ワークショップのルールとして他人の意見を批判しないことを徹底する。できる限りたくさんアイデアを出させる。  ■参加者全員に平等に意見を主張する機会が与えられ、一人一人の意見が尊重されながら建設的な意見交換ができるワークショップを通して課題を解決できるようにする。 【B 関係の中での自己 ※①他者理解 ④支えの気付き】
まとめ	(5) ワークショップを実施する中で、気付いたことを振り返りシートに書く。また、計画を実施するに当たって、「今の自分ができること」をワークシートに記入する。	○終末に今日の学習を振り返り、学習の成果を確かめられるようにする。 ☆多面的・多角的に解決策を考えるとともに、今の自分ができることについて表現することができたか。（思・判・表）

※表中の○数字は、自尊感情の3つの観点の小観点を示しています。「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」(30ページ 表10)参照

6 学習の効果

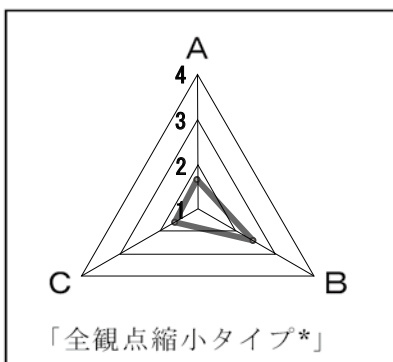
(1) 生徒全体の変容から

【学習後の自己評価から】〈質問〉友達と話し合うことのよさを感じることができた



〈考察〉  
質問に対し、全員が肯定的な回答をしている。  
「課題は難しかったが友達のいろいろな意見が聞けて勉強になった」「自分たちで案を出し合うことで、これまでに考えてもいなかったことを思い付いた」などという記述があり、ワークショップを取り入れた話し合いの工夫の効果があつたと考えられる。

(2) 個別の生徒の変容



〈取組後の生徒の感想〉  
自分に何ができるかなどをまじめに考えられた。ワークショップを通して、友達のいろいろな考えがあると知り、面白いと思いました。

〈考察〉  
全観点が低い傾向にある生徒であるが、意欲的に学習に取り組むとともに、友達と話し合うよさや、学習の成果を実感することができた。

\*タイプについては、指導資料〔基礎編〕13～15ページを参照



（指導方法）を工夫することで自尊感情や自己肯定感を高める実践事例）

（イ）主体的に取り組める教材・教具の工夫  
【特に重点とする観点 「A 自己評価・自己受容」】

「主体的に取り組む」とは

「できた、分かった」という実感や達成感を味わえるようにし、主に観点「A 自己評価・自己受容」を高めていく方法である。本実践では、主体的に学習に取り組めるよう「教材・教具」の工夫に視点を当てた。

主体的に取り組める「教材・教具」の工夫例

○関心・意欲を高める

子供の生活に関わりの深い教材や見て理解できる教材・教具を活用することで、学習への関心・意欲を高める。

○理解を助ける

具体的に操作ができるものや見て理解できる教材・教具、ワークシートなどの教材・教具を活用することで、学習の理解を助ける。

○コミュニケーションを活発にする

黒板や電子情報ボード、ワークシートや付箋紙などの教材・教具を活用し、子供同士の情報交換や意見交換などのコミュニケーションを活発にする。

○学習の成果を確かめる

取組カードや振り返りカードなどの教材・教具を活用し、毎時間もしくは単元の学習を通して成果を確かめられるようにする。

実践事例4 特別支援学校 小学部低学年 図画工作

＜本実践の概要＞ 素材の感触を味わうことを楽しみながら、児童が自ら作りたい作品を選ぶことができるようにする。分かりやすい道具の工夫で意欲が高まるようにし、完成作品に意味付けを行うことで作り上げた達成感を味わい、自己肯定感を感じられるようにする。

1 題材名（教材名）

「はらぺこあおむしが土曜日に食べた食べ物を作ろう」

関連資料「はらぺこあおむし」エリック・カール作 偕成社

2 題材の目標

- ・ 道具や手などを使い、紙粘土にたくさん関わることができる。
- ・ 素材を変化させる喜びを味わう。
- ・ イメージをもって、自分の作りたい食べ物を作って楽しむ。
- ・ 手順表や色付き容器を手掛かりにして作り方を理解し、一人で作品を作る。

3 題材の評価規準

造形への 関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
自ら粘土に触ってみようとする。 作りたい作品を自分で選んで作ろうとする。	材料などを基に、作りたい作品を選択したり、色や形を考えたりしている。	手などの感覚を働かせながら材料や用具を使い、イメージをもって表している。	完成した作品の形や色などから、面白さに気付いたり、楽しさを感じたりしている。

4 題材の指導計画（全4時間）

時	学 習 活 動
1	「スイカ」か「ソーセージ」のどちらかを選択し、紙粘土で材料を作る。 紙粘土を組み合わせるなどして作品を作る。
2	「ペロペロキャンディ」か「カップケーキ」のどちらかを選択し、紙粘土で材料を作る。 紙粘土を組み合わせるなどして作品を作る。
3	「チョコレートケーキ」か「さくらんぼパイ」のどちらかを選択し、紙粘土で材料を作る。 紙粘土を組み合わせるなどして作品を作る。
4 本時	これまで作った全6種類の中から作りたい物を選択し、紙粘土で材料を作る。 紙粘土を組み合わせるなどして作品を作る。

5 本時の展開

過程	学習活動	○指導上の留意点 ☆評価 ■自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点等
導入	(1) 本時の学習内容を知る。 ・「図工の歌」を歌う。 ・前時までの活動を振り返る。 ・本時の学習である紙粘土に絵の具を混ぜるなどの活動の説明を聞く。	○大型絵本を見せて、一人一人がこれまで作ってきた作品との関連付けができるようにする。 ○これまで作った6種類の作品を示して、選択できるようにし、作成への意欲をもたせる。
展開	(2) 自分の作りたい作品を選択する。 (3) 選択した作品の材料を作る。 ・「スイカ」「ペロペロキャンディ」「さくらんぼパイ」など6種類から一つを選んで、選択した作品の材料を作る。 (4) 自分で選択した作品を作る。   <p style="text-align: center;">スイカ                      ペロペロキャンディー</p> <p style="text-align: center;">さくらんぼパイ</p>	○一人一人、何を作りたいか、6種類の見本を見て選択できるようにする。 ○紙粘土を直接触れることに抵抗のある児童には、へらを使用できるようにする。 ■児童が、自分一人で取り組むことができるように次のような教材・教具を用意し、主体的に取り組むことができるようにする。 【A 自己評価・自己受容 ①成果の発揮】 ○見て理解できる教具と作成手順表を用意する。 ○「スイカ」は、赤色と緑色の粘土をどのように組み合わせたらよいか分かる専用の容器を用意する。 ○「ペロペロキャンディ」は、黄色と水色のそれぞれが粘土をどのように組み合わせたらよいか分かる台紙を用意する。 ○「さくらんぼパイ」は、黄土色と黄色の粘土をどのように組み合わせたらよいか分かる専用の容器を用意する。 ■一人でできるようになった活動については、本人に気付かせて、できたことを褒める。 【A 自己評価・自己受容 ③努力の評価】
まとめ	(5) 作った作品を見合い、感想を伝え合う。	☆手順表や色付き容器を手掛かりにして、作り方を理解し、素材に関わりながら作品作りを楽しむことができたか。

※表中の○数字は、自尊感情の3つの観点の小観点を示しています。「自尊感情や自己肯定感を高めるための指導上の留意点」(30ページ 表10)参照

6 学習の効果

<p>〈授業者のコメント〉</p> <p>直接、紙粘土に触れることができなかった児童が、達成感をもてるように教材・教具を工夫することにより、「これなら自分でできる」という自信や活動への意欲をもてるようになった。</p> <p>回数を重ねる度に、児童は、「次は、これを作りたい」「作った作品をみんなに見せたい」などの意欲が見られるようになった。</p> <p>この変化を見ていた他の友達も、自分もやってみようというやる気が出て、よい影響を与えることにもつながった。</p>	<p>〈学習時の子供の言葉〉</p> <p>「紙粘土に直接触れずに、へらなどを使うと自分でもできる。」</p> <p>「(誇らしげに)次は、『ペロペロキャンディ』を作ってみたい。」</p> <p>「自分が作った作品をみんなに見てもらいたい」</p> <p>〈考察〉</p> <p>紙粘土に直接触れることができないなど、子供にとって、苦手な活動がある場合には、一人一人のもてる力が発揮できる場を設定した。このことで、自分のよさを実感し、自分を肯定的に認めることができるようになったと考えられる。</p>
---	---

(4) 実践の結果

研究協力校における取組から、学校・家庭・地域など、子供との関わりをもつ人々が、意図的・計画的・組織的に指導を行ったり、適切に働き掛けたりしていくことで自尊感情は高まることが分かった。各教科等の指導等における実践事例では、「自分のよさに気付くことができた」「自分が成長することができた」など自尊感情につながる実感をもたせ、それぞれの実践のねらいを達成することができた。こうした実践の積み重ねが子供の自尊感情を高めていくと考えられる。

次のレーダーチャート（図7）及び「自己評価シート」の回答結果（表9）は、ある中学校の生徒の「自己評価シート」の結果である。本生徒の場合は、「問4 私は自分のことが好きである」や「問10 私は自分という存在を大切に思える」など、「A 自己評価・自己受容」に関わる項目で自尊感情の傾向が高まっていることが分かる。

図7 自尊感情の傾向レーダーチャート

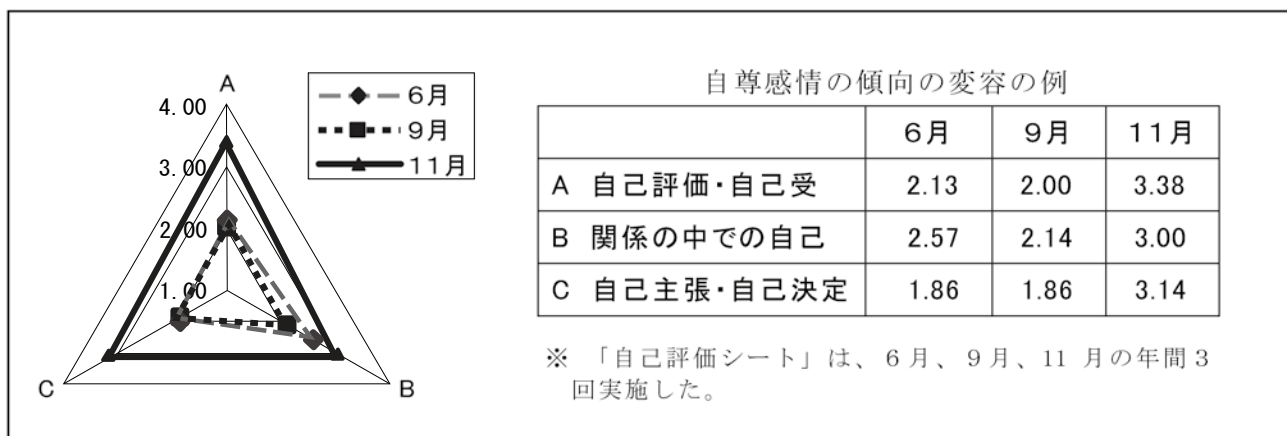


表9 「自己評価シート」の回答結果（自尊感情の傾向の変容の例）

項目	6月	9月	11月
問1 私は今の自分に満足している	1	1	3
問4 私は自分のことが好きである	1	1	3
問5 私は人のために力を尽くしたい	2	4	3
問6 自分の中には様々な可能性がある	1	2	3
問10 私は自分という存在を大切に思える	1	2	3
問12 私は自分の長所も短所もよく分かっている	1	1	4
問15 私には誰にも負けないもの(こと)がある	2	2	4
問16 自分にはよいところがある	2	2	3
問17 自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している	3	2	4
問21 私は自分の個性を大事にしたい	3	2	4
問22 私は人と同じくらい価値のある人間である	2	2	4

※ 表の中の数値は、4：あてはまる 3：どちらかというにあてはまる 2：どちらかというにあてはまらない 1：あてはまらない

※ 「自己評価シート」の項目の中で特に高まった項目を抜粋した。

この中学校では、学校の教育活動全体で組織的に生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育を推進し、教師が共通理解の下で、様々な実践を行った。その中で、教師は、生徒に自信をもたせたり、自分のよさに気付いたりする活動を意図的に取り入れていた。その指導の一部を紹介する。

**理科の授業では・・・**

分かりやすい資料の提示をしたり、学習内容を確認しながら自分で考え書き込めるワークシートを作成したりして、生徒にしっかりと学習内容を身に付けさせる授業を行い、生徒に「授業が分かる」という自信をもたせるようにしました。

また、討論等の場を設定し、自分の考えを友達に伝えたり、友達の考えを聞きながら学び合ったりする活動を取り入れ、自分のよさや友達のよさに気付かせる学習活動を行いました。

（実践の詳細については、22～23 ページ 実践事例 2 を参照）

**職場体験では・・・**

事業所の方との交流を通して、直接その人の価値観や生き方に触れることで、自分の個性やこれからの生き方について考えさせました。

また、事業所の方から頼られていることに対する責任感をもたせ、自分の役割をしっかりと果たしていかなければならないことを理解させることで、自分という存在について考えさせるよう助言しました。

（実践の詳細については、指導資料【発展編】69 ページ 実践事例 11 を参照）

また、これまでの生徒の学校生活の様子や学習状況などについて担任に尋ねた。すると、次のような教師の指導や関わり方が日常的に繰り返されていたことが分かった。

＜〇〇さんの担任の話＞

〇〇さんは、これまで自分の得意なことを発揮する場面や努力したことを他者から認められる機会が少ない状況にありました。そこで、〇〇さんに学級での係活動などの役割を与え、その役割を果たしたり、努力して取り組んだりしたことに対して「ありがとう」という言葉を意図的に掛けるようにしました。また、〇〇さんが学校で努力したことを保護者に報告するとともに、家庭でも〇〇さんが努力して取り組んだことを認め、励ましてもらえるよう保護者に話し、学校と家庭が共通理解の下で〇〇さんに関わるよう努めてきました。

学級では、友達が努力して取り組んでいることを認め、互いに励まし合い、「努力する人が認められる環境」をつくりました。すると、生徒は、努力している友達を積極的に見付け、その友達の成果を認め、「私も、〇〇さんのように頑張ろう」というように、生徒が互いに高め合う雰囲気ができ、意欲的に活動するようになりました。

このような生徒の自尊感情や自己肯定感を高めるための指導を、全校で組織的に行うために、担任を受け持つ教員が集まって「担任勉強会」を開き、担任としての悩みを共有したり、担任同士と一緒に解決策を考えたりして、生徒への指導や関わり方についての共通理解を図っています。

このように、日々の各教科等の指導と合わせて、生活指導や学級経営、家庭や地域との連携等の充実を図ることで生徒の自尊感情や自己肯定感を高めていくことにつながる事が分かった。



### 3 要因分析に関する慶應義塾大学の調査研究

#### (1) 平成 22 年度の調査研究

センターは、慶應義塾大学との共同研究により、昨年度、自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」を開発し、この尺度を用いた調査研究を行った。その調査結果については、「『自尊感情や自己肯定感に関する研究』報告書」（慶應義塾大学 平成 23 年 3 月）にまとめられている。以下は、その内容より作成したものである。

#### ア 中学校での自尊感情を活用した生徒理解

以下の事例は、生徒が二つの時点で回答した自尊感情の得点の変化に注目し、生徒の自己評価による自尊感情の得点（客観的指標）と教師の観察（主観的観察）の両面から生徒理解を行った事例である。この生徒については、たびたび、校内委員会にて対応を検討してきた。その生徒の自尊感情の得点とその高低に関連する要因について着目した。

・調査時期	1回目：平成 21 年 6 月、2回目：平成 21 年 10 月
・調査対象	都内公立中学校第 1～3 学年の生徒（407 人）
・調査内容	自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（22 項目）、「教師のチェックリスト」

#### <結果>

この生徒（図 8）は、日常の様子から真面目でしっかりしている生徒であることがうかがえる。学校行事でリーダーを引き受け、取り組んでいたが、生徒自身で目標を高く上げてしまい、思うように進まなかった。このことがきっかけで、学校を休みがちになった。その後、この生徒は、教師や学級の友達、カウンセラーとの面談などの支えもあり、無事にリーダーの仕事をやり返ることができ、学校行事の後には、この生徒の表情が明るくなっていた。

1 学期と 2 学期を比較すると、「A 自己評価・自己受容」が大きく下がっていることが分かる。高い目標を設定し、そこに達することができない自分を受け入れられなかったことが影響していると考えられる。このように自尊感情の傾向は、その時の状況によって一時的に下がることもある。「自己評価シート」の結果のみで自尊感情の傾向を決め付けるのではなく、日常の生徒の様子を観察し、生徒理解の一助として調査結果を活用することが大切である。

#### <考察>

第一に、この中学校では、校内委員会等で情報を共有し合い、校内だけではなく、外部機関も含めて指導や支援に取り組んだ結果、生徒の自尊感情の傾向が高まった。一方で、教師による気になる子供への支援は、すでに問題行動が見られる生徒への支援が中心で、アプローチの方法が「問題行動から支援方法」を考える形であった。今後は問題行動への予防的観点からの支援を検討する必要がある。

第二に、自尊感情の得点が低い生徒の日常の学校生活を観察し、必要な支援をするという予防的な指標として自尊感情の得点が活用できると考えられることから、「自尊感情が低い」ことが「問題がある」と一面的な捉え方をするのではなく、自尊感情が低い生徒が「なぜ低いのか」を検討した上で、生徒の様子を見守っていく必要がある。

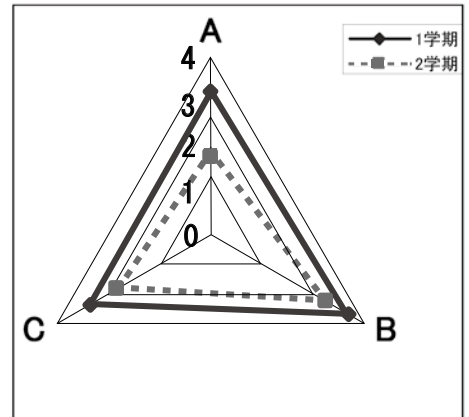


図 8 得点が低下した中 1 女子の事例

## イ 高等学校を対象にした調査結果・高等学校での不登校経験に関するインタビュー調査

自尊感情の高低に関連する要因として、不登校経験が関連すると考えられることから、不登校経験が及ぼす自尊感情の傾向について調査した。

・調査時期	1回目：平成22年5月、2回目：平成22年9月
・調査対象	都内公立高等学校第1学年の生徒（242人）
・調査内容	自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（22項目）、学校生活適応感尺度（10項目）、親子関係、出席・遅刻状況、高等学校入学後の変化に関する尺度（11項目）、不登校傾向を測る尺度（14項目）の各尺度の調査結果から、学校適応や不登校に関する内容等について自尊感情の3つの観点との相関を調査した。

### <結果>

- ・「A 自己評価・自己受容」は、「教師関係」「進路」との間に有意な正の相関が見られた。「B 関係の中での自己」は、学校適応に関する全ての得点との間に正の相関が有意であった。「C 自己主張・自己決定」は、「進路」との相関が最も強いが、「学業」「教師関係」「友人関係」でも正の相関が有意であった。
- ・自尊感情と不登校との関連については、自尊感情の3つの観点はいずれも不登校を促進する「拒否願望」「抑うつ感(※)」と負の相関があり、不登校を抑制する「友人居場所感」「良好な教師関係」とは正の相関があった。

※「抑うつ感」とは、「夜寝るときに明日のことを考えると憂鬱ゆううつになることがある」「学校に来ると緊張することがある」という抑うつに関することを示す。

### <考察>

第一に、「A 自己評価・自己受容」は「教師関係」、「B 関係の中での自己」は「友人関係」と「学業」、「C 自己主張・自己決定」は「進路」がそれぞれ正の影響をもつことが示唆された。

第二に、中学校で休まずに登校した生徒は、高等学校入学後も比較的良好であることに對し、中学校時に完全に欠席した生徒は、抑うつ感が強く、ほとんど登校することのできない生徒の中には、人間関係での苦手意識だけでなく、抑うつ感のような精神的ダメージを伴うものも多いことがうかがえた。

また、平成23年2月～3月、都内公立高等学校において、不登校を経験した生徒を対象に、不登校になったときの気持ち、周囲の他者からの援助、登校のきっかけ、不登校経験に対する現在の意味付けについて、質問紙法及び面接による調査を実施した。その結果、不登校を経験した生徒は、「学校に行かなくてはと思うが行けない」という葛藤や「行ったら友達がいなくてもいいかもしれない」という不安、「行っても教室に入るのが気まずい」などの実際に登校してみたときのネガティブな感情を抱えていることが分かった。また、不登校になったときに周囲の他者からしてもらって嬉しかったこととして、「友達がメールをくれた」などの直接的な働き掛けと同時に、家族が「普通の会話をしてくれた」「話を聞いてくれた」「先生が必要以上に声を掛けなかった」などの比較的直接的でない働き掛けなどの回答があった。また、10名中5名の生徒が「放っておいてほしかった」と回答していることから、心配はされているが過剰に踏み込まれることなく見守られているという周囲の姿勢が生徒を安心させる可能性があることが示唆された。そして、不登校を経験したことについては、後悔の感情を抱くだけでなく、友達への感謝の気持ちや苦しい経験を通し、自己を捉え直して自己理解を深めている様子が見られた。

## ウ 自尊感情に関する親子マッチングデータについて

子供の自尊感情の傾向に影響を及ぼす要因として親子関係が考えられることから、子供と親の自尊感情の傾向についての相関を調査した。

・調査時期	平成 22 年 10 月
・調査対象	都内公立幼稚園の幼児及び小学校の児童、幼稚園及び小学校の保護者
・調査内容	自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（22 項目）による保護者自身の自尊感情の傾向、家庭生活に関する項目（6 項目）、親子関係に関する項目（親の養育態度について 12 項目）、子供の行動面についての評定（自尊感情の高さに結び付くであろう行動特性について 14 項目）、子供の進路についての考え方及び子供と一緒に過ごす時間

### <結果>

- ・子供と親の自尊感情は、部分的であるが、弱い関連が示された。
- ・親が見ている「子供の行動」は、子供自身の自尊感情を部分的に反映しているが、それは強いものではなく、むしろ親自身の自尊感情との関連が強い。
- ・親が情緒的関与をしている場合、子供の自尊感情も部分的に高まる。

### <考察>

第一に、子供と親の自尊感情との関連が示されたことから、子供の自尊感情の回復・向上のためには、親の自尊感情を高めることが大切である。

第二に、子供の行動特性を肯定的に評価している親ほど、自らの自尊感情も高く評価している。つまり、子供に対する自信（我が子は意欲があり、友達も多く、落ち着いているという評価）が、親としての自信につながるということを示唆している。しかし、親の自尊感情の高さが子供への期待を過剰に高めてしまう場合がある。

第三に、子供に口出しをしたり、たくさんの習い事に通わせたりという統制的な態度が子供にとってマイナスに作用するわけではないと考えられる。親から支えてもらっていることにより、子供は自信をもって自分を主張したり、自分のことを決めたりすることができると考えられる。

## エ 広汎性発達障害があるのではないかとと思われる児童・生徒の調査

・調査時期	平成 22 年 6 月～12 月		
・調査対象（校種）	対象：児童・生徒	都内小学校 2 校	全学年（30 学級 1,057 人）
		都内中学校 2 校	全学年（27 学級 889 人）
		都立高等学校 1 校	第 1 学年（8 学級 240 人）
		都立特別支援学校 1 校	（51 人）合計 2,237 人
	担任教師	対象児童・生徒の教師	（65 人）
・調査対象（群）	①群	教師による評価（チェックリストによる判定）により抽出された通常の学級に在籍する広汎性発達障害の児童・生徒	
	②群	特別支援学校に在籍する広汎性発達障害の児童・生徒	
	③群	教師による評価（チェックリストによる判定）により抽出された広汎性発達障害ではない児童・生徒	
	④群	教師による評価（チェックリストによる判定）では評価が付かない児童・生徒の自尊感情の傾向を比較した。	
	以上の①②③の 3 群と④群の自尊感情の状態を比較した。		
※ 教師による評価で使用したチェックリストの項目には、学習関係（「成績が悪いのを悩んでいる」など 7 項目）、保護者との関係（「保護者とうまくいっていない」など 3 項目）、学校での様子（「場に合った、声の大きさができない」など 17 項目）、性格（「短気で怒りやすい」など 9 項目）、運動（「運動全般を嫌悪と感じている」など 4 項目）、反社会性（「非行傾向（校則違反・逸脱行為）がある」など 3 項目）、今把握できる事実（「広汎性発達障害/アスペルガー症候群と診断されている」など 4 項目）、自尊感情（「自尊感情が低くみえる」1 項目）がある。			



<結果>

- ・「A 自己受容・自己評価」では、各群の間に有意差は見られなかったが、①群の平均値が低い傾向を示した。
- ・「B 関係の中での自己」では、②群と④群が有意に高い傾向を示した。
- ・「C 自己主張・自己決定」では、②群と④群と比較して③群が有意に低い傾向を示した。

<考察>

第一に、①群は、自尊感情3得点全てに低い傾向を示し、この群が学校適応に障害を抱えていることを示唆している。障害特性でもある「B 関係の中での自己」は、④群よりも有意に低く、特にこの自尊感情の領域に課題があることが示唆された。

第二に、②群は、自尊感情3得点の全てに高い傾向を示した。これは、広汎性発達障害であったとしても、特別支援学校の環境等の支援が行き届いていることから、学校に適応していることが示唆された。

第三に、③群は、「B 関係の中での自己」と「C 自己主張・自己決定」で④群よりも有意に低い傾向を示した。これは、教師から見た「気になる子供」が、①群よりも自尊感情は高いが、④群に比べ学校に適応できない状態であることを示している。

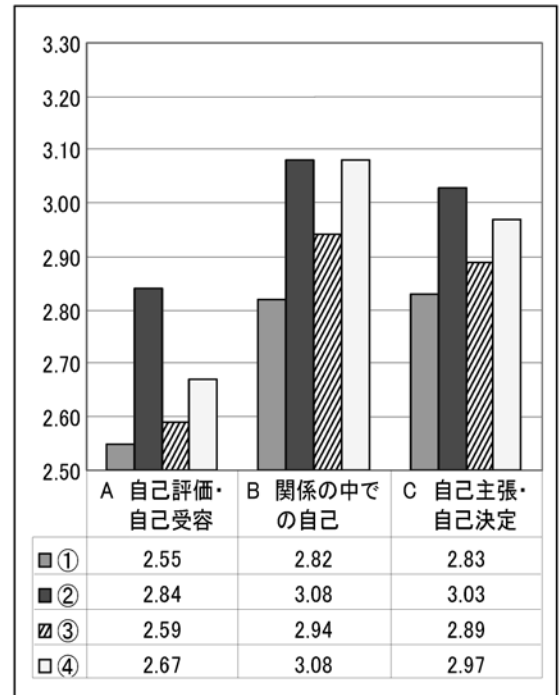
これらの結果について慶應義塾大学の伊藤美奈子教授は、東京都教職員研修センターにて行われた平成23年度夏季集中講座において、「慎重な読み取りが必要であり、簡単に解釈することは難しい。」という見解を示している。また、「早期から適切な関わりを受けている子供たちの自尊感情は大きく低下せず、周囲の理解が不十分でいじめられたり、叱られたりする経験を積むことによって自尊感情が低下する傾向があるという二次的な障害として自尊感情の低下を示す子供たちが多くいることを示している。さらに、特別支援学校の児童・生徒については、自分のことを客観的に捉えることができずに高得点になっている可能性があることを示唆している。」と述べている。

オ 諸外国における子供の自尊感情の傾向

諸外国における子供の自尊感情の傾向として、日本・中華人民共和国（以下、「中国」と表記。）及び日本・大韓民国（以下、「韓国」と表記。）の中学生・高校生を対象に調査を実施した。その調査結果については、「『自尊感情や自己肯定感に関する研究』報告書追補版」（慶應義塾大学 平成23年9月）にまとめられている。以下は、その内容より作成したものである。

これまでの自尊感情に関する国際比較研究では、日本の子供の自尊感情が低いことを示すものが多く、その要因として我が国の文化的な特徴から様々な考察がなされてきた。我

表 11 各群の自尊感情 3得点の平均の比較



が国の中学生・高校生は、アメリカ合衆国・中国・韓国と比較して自分の能力に対する信頼や自信に欠けているという結果が報告されている（財団法人 一ツ橋文芸教育振興会 財団法人 日本青少年研究所 平成 23 年 3 月）。

これらの国際比較研究を踏まえ、日本と中国及び韓国の中学生・高校生の自尊感情の傾向や学校生活等の現状を把握し、各国の子供の自尊感情に関する特徴を明らかにした。

**(7) 中学生・高校生の自尊感情に関する日本・中国比較研究**

・調査時期及び対象	日本	時期：平成 21 年 12 月～平成 22 年 1 月 対象：都内公立中学校及び高等学校の生徒(2,689 人)
	中国	時期：平成 22 年 9 月～12 月 対象：北京市の中高一貫校の中学校及び高等学校の生徒（1,011 人）
・調査内容	自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（22 項目）、「学校享受感尺度」（10 項目）、「学校環境適応尺度」（「友人関係適応」、「教師との関係適応」、「学習意欲」、「進路意識」の項目）(24 項目)、「個人志向性・社会志向性 P 尺度」「個人志向性・社会志向性 N 尺度」（30 項目）	

＜結果＞

- ・自尊感情の傾向については、自尊感情の 3 つの観点の全てにおいて、日本の子供よりも中国の子供の方が高い傾向を示した。（表 12）
- ・友人や教師との関係への適応、学習意欲、進路意識などの学校環境適応感については、中国の子供の方が高まる傾向を示した。（表 13）
- ・学校享受感については、中国の子供よりも日本の子供の方が高い傾向を示した。（表 14）

※ 表 12、表 13、表 14 の得点は、4 点満点とする。

＜考察＞

このように自尊感情と学校適応、発達・適応の指標となる個人志向性・社会志向性についての日本と中国の比較では、自尊感情を含むほとんどの項目（自尊感情 3 得点、学校適応 4 得点、個人志向性・社会志向性 4 得点）で、日本の子供たちの方が自己評価が低いことが分かった。このことについて、慶応義塾大学の同報告書では、「日本と中国の文化差（自己を主張し表現することを重視してきた中国に対し、自我を出し過ぎることを嫌い、謙譲を美德と考える日本）も背景要因として関与しているのかもしれない。」と述べている。また、「日本では、自尊感情という意識が必ずしもプラスの意味だけに解釈されない可能性があることも示唆された。」と述べている。

表 12 自尊感情に関する日本・中国の比較

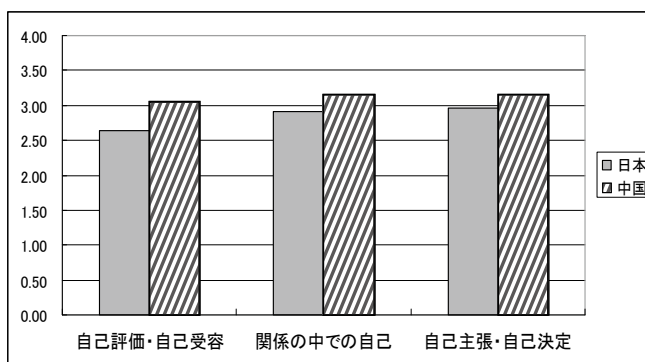


表 13 学校環境適応感に関する日本・中国の比較

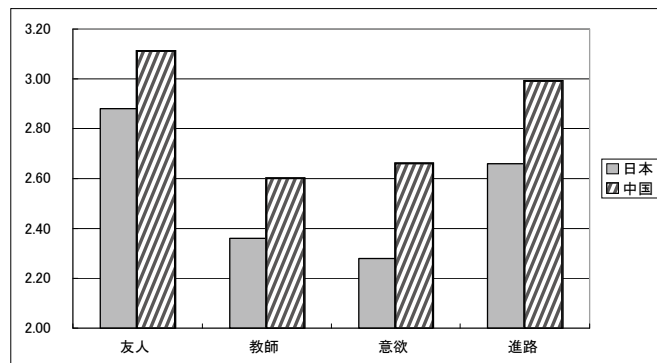
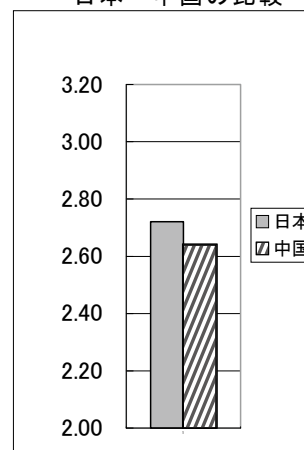


表 14 学校享受感に関する日本・中国の比較



(イ) 中学生・高校生の自尊感情に関する日本・韓国比較研究

・調査時期及び対象	時期：平成21年11月～平成22年3月 対象：日本 都内公立中学校第2学年～高等学校第2学年(711人) 韓国 ソウル特別市行政区の中学校第2学年～高等学校第2学年(771人)
・調査内容	自尊感情に関する項目(9項目)、学校生活に関する項目(12項目)、教師関係に関する項目(11項目)、家族関係に関する項目(12項目)、規範意識に関する項目(5項目)、友人関係に関する項目(12項目)

<結果>

・「B 関係の中での自己」は、日本の方が高く、「A 自己評価・自己受容」「C 自己主張・自己決定」は、韓国の子供の方が高い傾向を示した。

(表15)

・日本の中学校3年生は、高等学校への入試を控える時期に、進路意識と関連する観点である「C 自己主張・自己決定」が高まる傾向が示された。

(表16)

※ 表15、表16の得点は、12点満点とする。

・両国とも、友人や教師、家族など身近な他者との関係が強いほど自尊感情が高い傾向にあることが示された。

<考察>

慶應義塾大学の同報告書では、韓国において学校で重視することは、予習・復習面などの学業面、日本では校則や学級のルールなど学校生活面という違いがあることや、両親との親密さやコミュニケーションの頻度は、韓国よりも日本の方が高い傾向にあるが、友人関係は、日本よりも韓国の方が友人関係の親密度が高いことなど、日本と韓国の子供の生活環境の違いが背景にあることについても着目している。

また、同報告書では、「A 自己評価・自己受容」「C 自己主張・自己決定」の観点に関わる得点の低さが日本の子供たちの自尊感情の低さに影響すると考察している。このことから、今後の課題として、この二つの観点到焦点を当て、中学生・高校生における自尊感情や自己肯定感を培う教育的アプローチが必要であることを示唆している。

表15 自尊感情に関する日本・韓国の比較

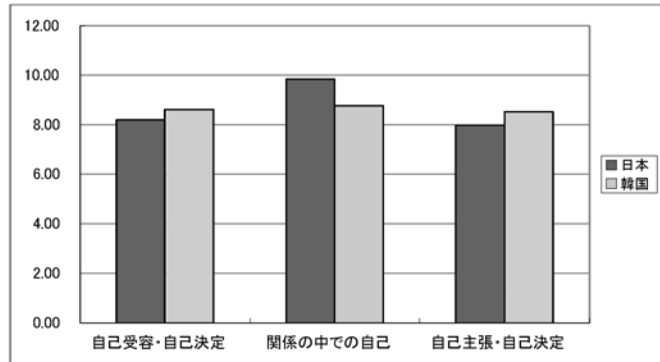
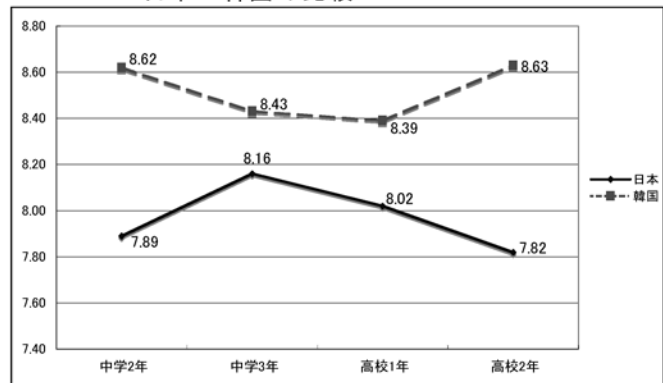


表16 「C 自己主張・自己決定」に関する日本・韓国の比較



## (2) 平成 23 年度の調査研究

平成 22 年度までの調査研究により、これまでのセンターと慶應義塾大学との共同研究により、「自尊感情や自己肯定感」は、学習、友人関係、教師との関係等に関連があることが分かった。そこで、今年度は、「自尊感情や自己肯定感」と規範意識、社会性、子供の家庭での生活習慣等との関連について調査を行った。

・調査時期	平成 23 年 9 月～10 月、
・調査対象	都内公立小学校（520 人）・中学校（454 人）・高等学校（554 人）
・調査内容	自尊感情測定尺度（東京都版）「自己評価シート」（22 項目）、規範意識に関する尺度（「授業中は、授業に関係のないことをしてはいけない」など）、社会性に関する尺度（「ゴミを道に捨てる」など）、親子関係や家族関係に関する尺度（「保護者は、私のすることによく賛成してくれる」「家族と読書をする」など）、友人関係に関する尺度（友達の数や人気のある友達の特徴）等の各尺度の調査結果から、規範意識や社会性に関する内容等について自尊感情の 3 つの観点との相関を調査した。

### ア 「自尊感情や自己肯定感」と「規範意識」との関連

<結果>

- ・「学校のきまりなどをどう思うか」について調査を行った結果、規範意識と自尊感情や自己肯定感には関連があり、規範を肯定的に捉えている子供ほど、自尊感情が高い傾向にあることが分かった。

<考察>

規範意識を高めることが、自尊感情や自己肯定感を高めることにつながることを示唆された。学校のきまりが守れず、注意されることが多い児童・生徒は、自信をもてず、やる気につながらない姿が見られる。日頃から、教員の共通理解の下、継続的に、校則などのきまりを守ることを指導することや、小学校・中学校・高等学校で連携した指導についても充実を図る必要がある。

また、規範を受容する理由として、小学校・中学校・高等学校ともに、9 割以上の子供が、「人の迷惑になるから」と回答している一方で、「自分を大切にしたいから」と回答する児童・生徒は 5 割～6 割程度になっていることも分かった。このことから、さらに子供の内面に根ざした規範意識の醸成を図る必要があることが明らかとなった。

### イ 「自尊感情や自己肯定感」と「家庭での生活習慣」との関連

<結果>

- ・子供が保護者をどのように捉えているかの意識や、家族との過ごし方などに関する調査を行った結果、保護者に理解され、認めてもらっていると認識している子供ほど、自尊感情が高い傾向にあることが分かった。また、家族と一緒に料理をしたり、スポーツをしたりするなどの経験がある子供は、自尊感情や自己肯定感が高い傾向にあることが分かった。

<考察>

小学生の約 90%、中学生の約 74%、高校生の約 64%が、「相談できる人」について「家族」と回答していることから、保護者が子供の悩みを受け止めたり、相談を受け入れやすい状況をつくったりしていくことが重要である。家庭との関わりが子供の自尊感情や自己肯定感の高低に関連することを踏まえ、学校では、保護者会や面談等を活用し、家庭への支援や助言をしていくことが必要である。

## 第5 研究の成果と今後の方向性

### 1 研究の成果

#### (1) 一人一人の自尊感情の傾向を把握するための方法の提示

自己評価を行うことが難しい子供の自尊感情の傾向を把握する方法として「他者評価シート」を開発し、それらを用いることで、全ての子供の自尊感情や自己肯定感の傾向を把握することができるようになった。

#### (2) 教育活動全体を通して自尊感情を高めるための取組を意図的・計画的・組織的に推進するための方法の提示

職層に応じた役割分担、自尊感情や自己肯定感を高めるための校内組織づくり、研修の在り方等を提案するとともに、授業改善を目指した実践事例を提案することができた。

#### (3) 自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の推進に活用できる指導資料の開発

自尊感情や自己肯定感に関する研究・研修や教育活動を推進する際に活用できる実践的な資料（「子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料」【発展編】）を開発し、学校が家庭や地域と連携した教育活動等に活用できるようにした。

### 2 今後の方向性

次年度は、5カ年計画で行ってきた本研究の最終年度となる。よって、これまでの研究成果の一層の活用と普及・啓発を図るために、次の3点について取り組む。

(1) 「自尊感情や自己肯定感を高めるための教育」推進校・園の指定を6校・1園に規模を拡大し、推進校・園を拠点とした子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育活動を推進するとともに、開発したシートの有効性を検証する。

(2) 「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育フォーラム」（仮称）を開催し、学校・家庭・地域が一体となった自尊感情や自己肯定感を高めるための具体的な方策を提言するなど、研究成果を広く都民に周知する。また、教員や保護者等が活用できる資料を作成し、学校等に配布する。

(3) 平成 22・23 年度に作成した指導資料（基礎編・発展編）を活用した教員研修等を充実させ、研究成果の普及・啓発を行う。

### ○ 参考資料・文献

- ・幼稚園教育要領解説 文部科学省 平成 20 年 3 月告示、小学校学習指導要領 文部科学省 平成 20 年 3 月告示、中学校学習指導要領 文部科学省 平成 20 年 3 月告示、高等学校学習指導要領 文部科学省 平成 21 年 3 月告示、特別支援学校幼稚園教育要領・小学部・中学部学習指導要領・高等学校学習指導要領 文部科学省 平成 21 年 3 月告示
  - ・「生徒指導体制の在り方について調査研究」報告書－規範意識の醸成を目指して－ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 平成 18 年 5 月
  - ・生徒指導資料第3集 規範意識をはぐくむ生徒指導体制－小学校・中学校・高等学校の実践事例 22 から学ぶ－ 国立教育政策研究所 生活指導センター 平成 22 年 3 月
  - ・CS研レポート Vol.55 教科教育研究所編 啓林館 平成 17 年 6 月 収録 国立教育政策研究所 総括研究官 滝 充 「規範意識の形成と教師の指導力」
  - ・個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 伊藤美奈子著 北大路書房 平成 9 年 3 月
  - ・自己意識の心理学 梶田叡一著 東京大学出版会 昭和 63 年 2 月
  - ・セルフエスティームの心理学 自己価値の探究 遠藤辰雄・蘭千尋・井上祥治著 平成 4 年 6 月
  - ・高校生の心と体の健康に関する調査 報告書 日本・米国・中国・韓国の比較 財団法人 一ツ橋文芸教育振興会 財団法人 日本青少年研究所 平成 23 年 3 月
- 他各種研究資料